



人間文化研究機構 第22回公開講演会

画像資料による

# 日本人移民への新視点

満洲・ブラジル・南洋



講演Ⅰ 地図と写真から見る満洲移民と現地社会／劉 建輝

講演Ⅱ 両角貫一コレクションが捉えた日系ブラジル移民の暮らしぶり／細川 周平・根川 幸男

講演Ⅲ 強制収容所に届いた妻の手紙  
—仏領ニューカレドニアの沖縄移民／津田 睦美

閉会挨拶／小松 和彦



大学共同利用機関法人



vol.21

人間文化研究機構 第22回公開講演会

画像資料による

日本人移民への新視点 満洲・ブラジル・南洋

日時：平成25年10月11日（金）14:00～16:30

場所：国際日本文化研究センター講堂

主催：人間文化研究機構、国際日本文化研究センター

後援：文部科学省

## 目次

講演Ⅰ	地図と写真から見る満洲移民と現地社会	劉 建輝	03
講演Ⅱ	両角貫一コレクションが捉えた日系ブラジル移民の暮らしぶり	細川 周平・根川 幸男	45
講演Ⅲ	強制収容所に届いた妻の手紙 —仏領ニューカレドニアの沖縄移民	津田 睦美	63
閉会挨拶		小松 和彦	78





滿洲

Manchuria

# 地図と写真から見る満洲移民と現地社会

劉建輝 LIU Jianhui

国際日本文化研究センター教授 Professor, International Research Center for Japanese Studies

ただ今ご紹介いただきました劉建輝です。プレッシャーをかけられて、どう答えたらいいかわかりませんが、私も一応、旧満洲出身です。

今日は、先ほど機構長も、井上先生もご紹介くださいましたように、画像で、特に地図と写真で満洲の移民問題を振り返ってみようと思います。ほとんど画像なので、難しいことは申し上げません。

このシンポジウムの趣旨ですが、機構の方からこのテーマを頂いたときにどうすればいいかと考えました。最近には特にテレビ番組でもそうですが、よく日本人の海外進出をテーマにしています。実は80年ほど前、つまり戦前においても背景が若干違うのですが、多くの日本人が海外、特に当時「新天地」と言われた異国へ行って、いろいろな事業をやっていました。

ただ戦後、特に満洲などに関してはいろいろな背景があって、それを真正面から取り上げることはなかなか難しかったのですが、実はその存在は非常に大きく、今日においても現地への影響が大変大きいのです。ですから、その事実とちゃんと真正面から向かい合って、一緒に問題の所在を考えないといけないと思います。つまり、その遺産は正負を問わず、非常に甚大なものであったということを踏まえていろいろ考えなければならないと思います。

そういうことで、われわれは機構のプロジェクトを受け持っているわけですが、全体の研究課題としては「在外移民資料調査」というもので、戦前の移民に関連するさまざまな資料の調査を一生懸命進めています。

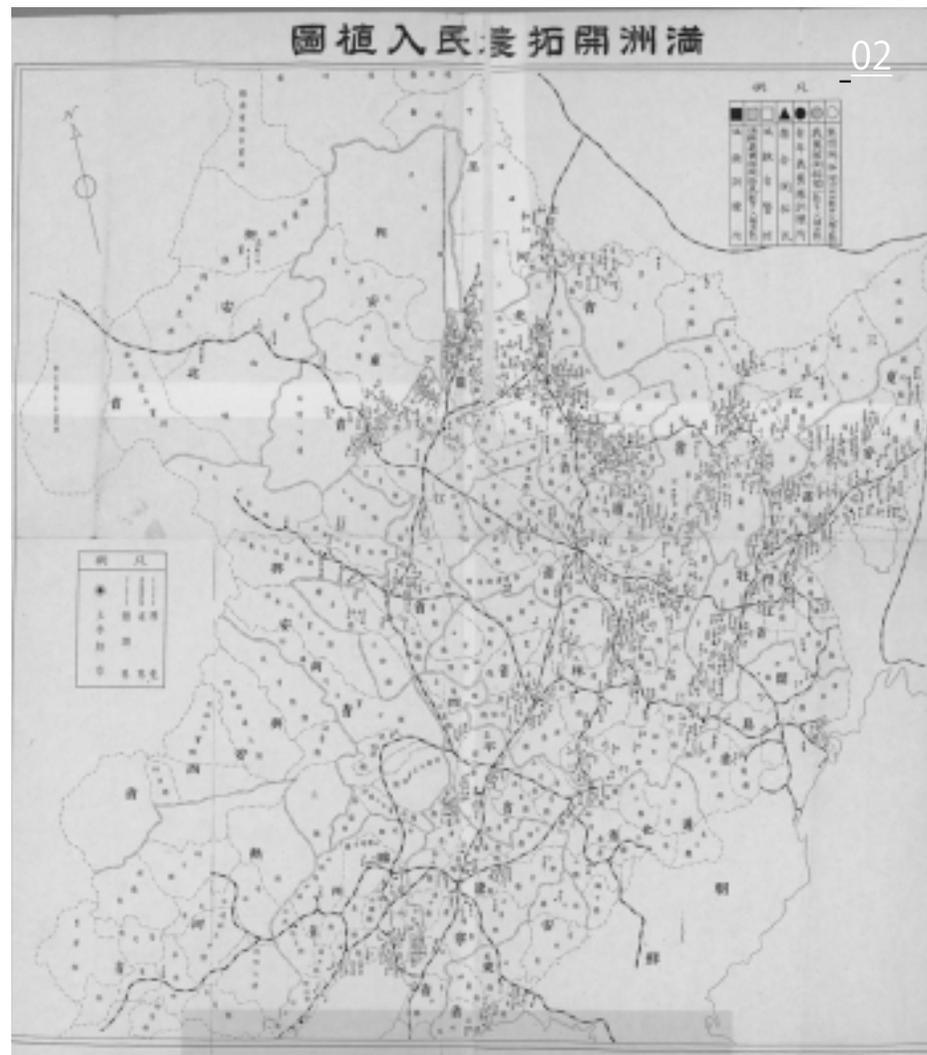
皆さんにとってはあるいは常識かもしれませんが、1945年、終戦時の満洲にはおよそ200万人強の日本人がいました。そのうち軍人が約60万人ぐらい、残りは満鉄社員も含めた、いわゆる普通の民間の方々です。これは、いわゆる旧帝国圏内の海外在留日本人300万人の半数近くになります。

満洲移民といえば悲惨な引き揚げ体験が語られて、特に開拓団や青少年義勇軍の話がいつも中心になります。しかし、それは全体の18%程度です。大多数は、むしろ満鉄沿線の都市部に住む住民でした。彼らが満洲で一体どういう活動を展開し、また、現地社会に対してどういう影響を与えたかということは、意外とあまり知られていません。時々、雑誌等では満鉄の特集を組んで「あじあ号」を出して、回想的な文章を載せることもありますが、その実態は一体どうなっているかということにはなかなか触れません。今日は、研究がやや手薄だったこの都市部の移民について、開拓民と比較しながら紹介したいと思います。その存在がいかなる意味を持つかということ、私なりに考えてみたいと思います。



01. 「滿洲農業移民入植圖」

02. 「滿洲開拓農民入植圖」



01 は滿洲農業移民の入植図です。ちょっと地図が大きくて、これ以上はつきり写せないのですが、例えばこの左上、ロシアと朝鮮に近いところに移民が集中しています。いわゆる農業移民です。しかし、私が申し上げたいのは、大連があって、そこから上のハルビンまでは満鉄沿線が続きますが、実はここにもたくさんの日本人住民がいたということです。駅ごとに集中するのですが、今日はそれを中心にお話したいと思います。

02 は同じく開拓民の地図ですが、01 より時期が若干後のものです。移民が徐々に上に向かって広がっていくことが分かります。この辺の大体のイメージを覚えていただいて、先に話を進めていきたいと思います。

## つくられた満洲観

日本人の満洲イメージというと、今はもうあまりそういうふうには考えていないと思いますが、昔であれば赤い夕陽や馬賊、満鉄、最近では特に「あじあ号」などがよく話題になります。また、戦争の話になりますが、関東軍です。ただその中で一番多く語られているのは、やはり開拓民や青少年義勇軍、農業移民でしょう。これはなぜかという、たぶん悲惨な引き揚げ体験が背景になっているからだだと思います。もちろん、その延長線上にはシベリア抑留があり、残留日本人孤児があります。あるいは、戦争にやや詳しい方であれば 731 部隊といった存在もご存じかと思います。

このイメージは一体どうやってつくられたのでしょうか。私の手元にあるいわゆる満洲本を集めて並べてみますと、そのほとんどが敗戦時の話に関するものです。『満洲難民』『死の逃避行』『脱出』『満洲脱出』『鞍山残影』『再見大連』『北満洲抑留日本人の記録』『たった独りの引き揚げ隊』『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』『裂かれた大地』のように、終戦時の体験談に集中しているのです。しかし、さきほども申しましたように、大連の歴史は、1898年にロシアの租界地ができて、その7年後に日本がそれを接収したわけですが、そこから1945年まで実に50年間近くもあります。そしてそれに付属している満鉄付属地も、同じ50年ぐらいです。そういうことを考えると、やはりもう少し全体的に移住民問題を考えなければいけないのではないかと思います。



03. 満洲引揚げ関連書籍  
04. 「嗚呼 満蒙開拓団」ポスター



例えば、「嗚呼満蒙開拓団」というドラマが4～5年前に放送されました。NHKが放送したのですが、中身を見ると、これも終戦時の悲惨な体験だけを取り上げています。



05. 「滿鮮概念圖」

## 滿洲の概況

まずここで本当の滿洲の概況を押さえておかないと、この話は進まないと思います。つまり、滿洲とは一体どういうところかということです。これは移民の背景になるのですが、滿洲はもともと滿洲族の父祖の地であり、長い間、封禁政策が取られてきました。漢民族は入ってはいけなかったのです。これは清王朝が始まってから、ほぼ19世紀後半まで続きます。

そしてロシアが南進してきて、沿海州などを取った後、清王朝がそれに対抗して、防衛上、住民がいなければいけないということで、はじめて漢民族の移民を推奨することになります。しかし、何しろ大変広い土地ですから、国境を管理するのが非常に難しく、そのため周辺からたくさんの移民がやってきます。河北省や山東省、朝鮮、そしてロシアからもどんどん入ってきます。そういう、もともとは移民の地であったということが非常に大きいと思います。

その後、ご存じのように、日露がそれを争奪して、最終的に滿洲を二分するという形になりました。そして、張作霖、張学良の統治、日本の進出という経緯を経て、滿洲国の成立と崩壊がありました。戦後の中国における滿洲の位置は日本にはあまり伝わっていませんが、実は上海と並ぶ最大の工業基地となっていました。もちろんこれは滿洲国の遺産だったのです。その意味は、今日においても非常に大きいと思います。具体的な数字は挙げませんが、戦前の1940年代初頭においては日本の約3倍の土地と約半分の人口を有していた、そういう場所だったということをまず確認しておきたいと思います。

これは滿洲の概念図です。ざっとご覧いただくとお分かりいただけるかと思いますが、両側に大興安嶺などの山が連なって、大きな盆地を作りだしています。山海関という場所を越えると、つまり関外、昔の滿洲族の地域です。この山を境に滿洲と蒙古が分かれています。この辺の山を越えると沿海州、今のロシア領です。ついでに申しますと、モスクワからウラジオストクにやってくる東清鉄道は、この横の線です。ここにハルビンという都市があって、そこから南に下がって大連まで来るのが東清鉄道の支線、後の南滿洲鉄道の一部になります。

## 日本との関わり

日本との関わりですが、ご存じのように、高句麗や渤海国時代に交流があったものの、その後はほとんど直接的な関係がありませんでした。日清戦争後、一時、日本が遼東半島だけを領有しました。しかしまもなく三国干渉によって返還し、そして、日露戦争によって再度奪還して、その時ロシアの権益も全て継承しました。

ここが大事です。「10万の英霊と20億の国帑」、つまり日露戦争では10万人が死んで、20億円のお金をかけたということです。ですから、満洲に対して、日本人はそもそもこの時点から心情的に別の意味を持っていたのです。普通の外国、外地とは若干違う意味を持っていたと私は思います。心情的に「国土」であるという意識を、どこか内的に潜めていたように感じます。これが、後々の満洲移民とつながっているのではないかと思います。そして、昭和に入って、資源と国防上の生命線と呼ばれ、満洲国の成立に至りますが、最後は、ソ連の侵攻による崩壊と日本人の引き揚げとなった次第です。

ついでに申しますと、満洲で生まれた、あるいは幼少期を過ごした著名人が結構おられます。皆さんもご存じかと思いますが、漫画家の赤塚不二夫や文学者の安部公房、また音楽家の小沢征爾、歌手の加藤登紀子など、たくさんいらっしゃいます。時々、著名人の経歴を見ると、あれっと思う事が結構あるのです。

## 日本人移住、移民の推移

ここで、移民の推移について若干申し上げたいと思います。先ほども申しましたように、いわゆる農業移民だけではなく、もともと都市部への移民もたくさん存在しました。つまり、日露戦争後、日本が勝利したことより、ロシアの租借地大連を接收したわけですから、ここをはじめとして、だんだん移民が始まりました。もちろん満鉄付属地にもたくさんやってきます。初期移民というのは大体、警備隊等を除隊した後、現地に残り、土地を買って移民するという形になっていました。

満洲国成立後は、国防上、ソ連に対する帝国間の力学により、いわゆる試験移民を始めます。武装移民とも言われましたが、これが5回にわたって行われました。その後、盧溝橋事件前後になって、今度は国策移民が進められました。当時の政府が20年間で100万戸を移住させるという政策を出していました。そんな中、有名な青少年義勇軍（義勇隊）が1938年から満洲にやってきたわけですから。

よく言われているのは大体以上ですが、実はこの他にいわゆる自由移民もたくさんいました。農業移民、林業移民、工業移民、漁業移民、そして商工移民という存在もありました。また、天理教が率先して満洲に行き、天理村もつくりました。

背景としては、日本国内の昭和恐慌です。それから、ソ連、つまり北の脅威に対する備えもあります。満洲で見つけた資料では、当時のソ連がどうやってシベリアに移民させるか、特に朝鮮人を連れ込んで開発させるかといった動きがかなり詳細に記録されているので、それに対抗して進めていた部分もあったかと思えます。



### 鉄道附属地の役割

ここで私が問題にしている満鉄附属地の話に入りたいと思います。先ほども申しましたように、まず、ロシアが大連を租借しました。これはドイツが青島を租借したことに對抗するものでした。その後、東清鉄道本線（満洲里～ウラジオストク）と支線（ハルビン～大連）開通させて、そこで絶対的かつ排他的な行政権を得ました。軍隊、警察、司法、徴税が全部できるような附属地をつくったわけです。つまり、租界に近いような存在だったと思います。そして日露戦争後、日本がその権益をそのまま継承して、満鉄の附属地をつくりました。この意味は非常に大きいと思います。

東清鉄道は清が倒れたあと中東鉄道に改称し、その後、張作霖政権との合併、それから満洲国との合併、最後は満洲国に売却されました。実際は日本が買ったのですが、満鉄が所管することになりました。これで満鉄が満洲全体の鉄道を管理することになったわけです。

## 主な満鉄付属地

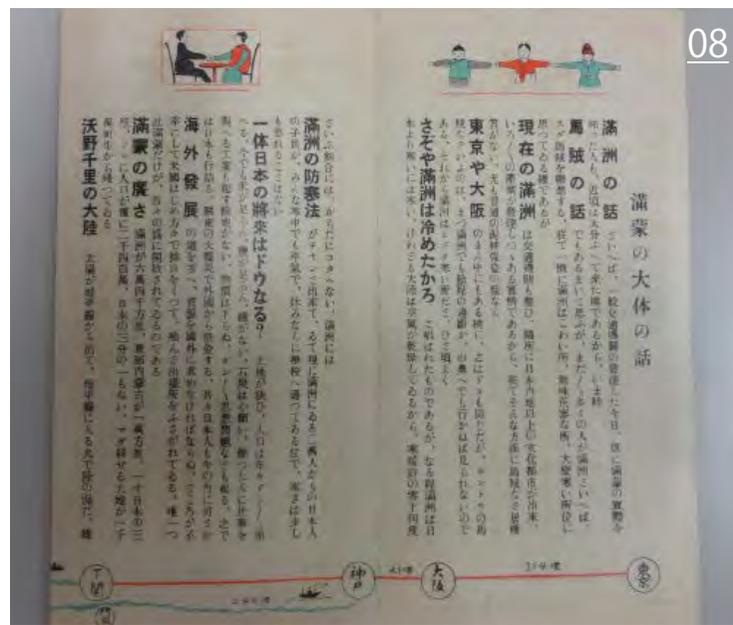
ここはとても大事なので、ぜひ地名を一緒に確認しておきたいのですが、大連から出発して、大石橋、宮口、鞍山、遼陽、奉天、鉄嶺、開原、四平街、公主嶺、そして新京にたどり着きます。これは全て満鉄付属地のある場所で、そこに移民が集中的に住んでいました。1940年代初頭の統計では、例えば奉天の付属地には7万人近い日本人が住んでいました。もちろんこの他、普通の市街にも多くの日本人がいたので、これは不完全な統計です。

新京までは南満鉄道で、そこから先は北満鉄道になります。支線も多少あって、本溪湖から安東、そして朝鮮につながります。安東にはもう一つ、撫順からの鉄道も通っていました。なぜそれらの支線をつくったかという点、本溪湖は炭鉱の町、そして撫順も炭鉱の町です。そういう意味では、まさに資源を押さえる形で沿線ができたと言っても過言ではありません。安東は今の丹東で、朝鮮の新義州とは国境で接しています。

ここで注目したいのが、この沿線です。大連から北上して、ここが瀋陽になります。ここから朝鮮に行く鉄道を引いています。それから、本溪湖と撫順に行く支線です。ちょっと短く描かれていますが、奉天から長春への満鉄沿線は結構長い距離です。

## 昭和 15 年前後という時空 ～ 満洲への旅へ

文字で説明してもあまり面白くないので、ここで一緒に旅の体験をしたいと思います。私は昭和 15 年が非常に大きい意味を持っていると思っています。いろいろな意味で日本が一つの絶頂期を迎えて、総合文化力がとてつもなく大きかったということは、これからご紹介する資料でよく確認できると思います。今回、満洲の文化に関する映像や画像を見ることで、当時の日本帝国の実力と文化力を一つの形のあるものとして可視化することができるのではないかという気がします。ですから、ここで一人の擬似移住者、擬似移民となって一緒に体験したいと思います。そしてそれを可能にしてくれるのは当時の地図と旅行案内図です。

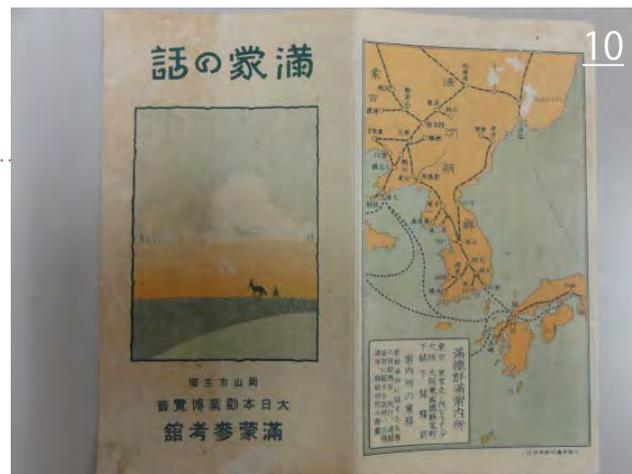


満洲の概況を理解しないとこの話は進まないのので、『満蒙大体の話』を紹介したいと思えます。07-09のようなパンフレットが出されています。「大体の話」というのは、例えば馬賊の話、それから、満洲は寒いだろうということで満洲の防寒法の話、また、将来はどうか、海外での発展につながるかどうかといったような話が書かれています。そしてこのように地図を付けて案内しています。

さらに、もう少し詳しくなると、10『満蒙の話』になります。旅行案内もたくさんでまわってまして、11のように小さい文庫本サイズのものもあります。

# 旅行案内

## Guidebook



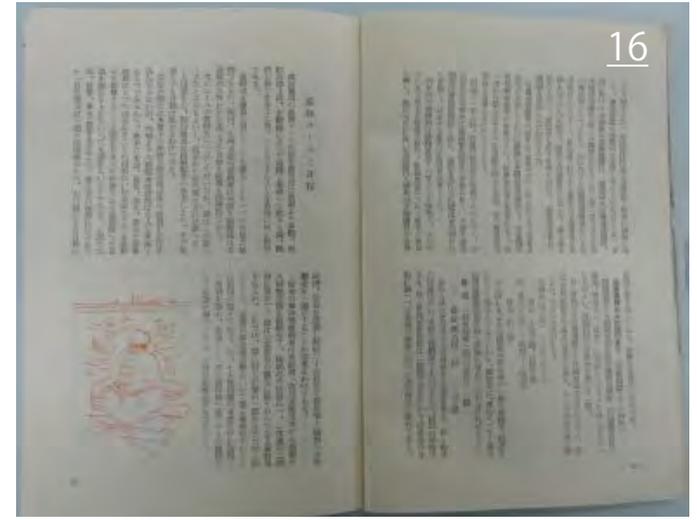
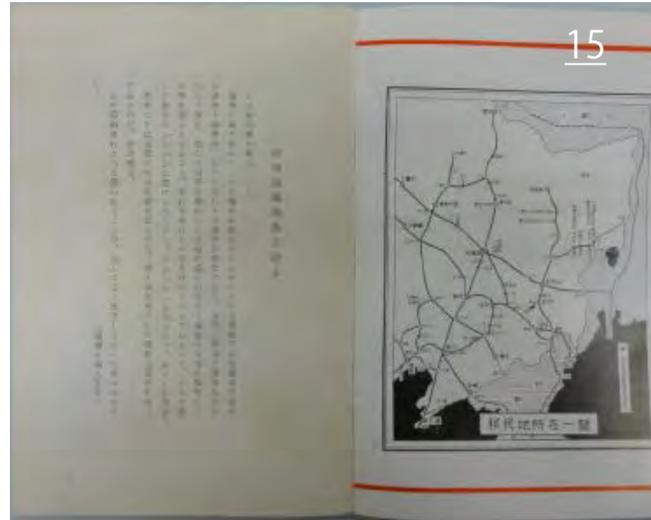
07-09 『満蒙大体の話』

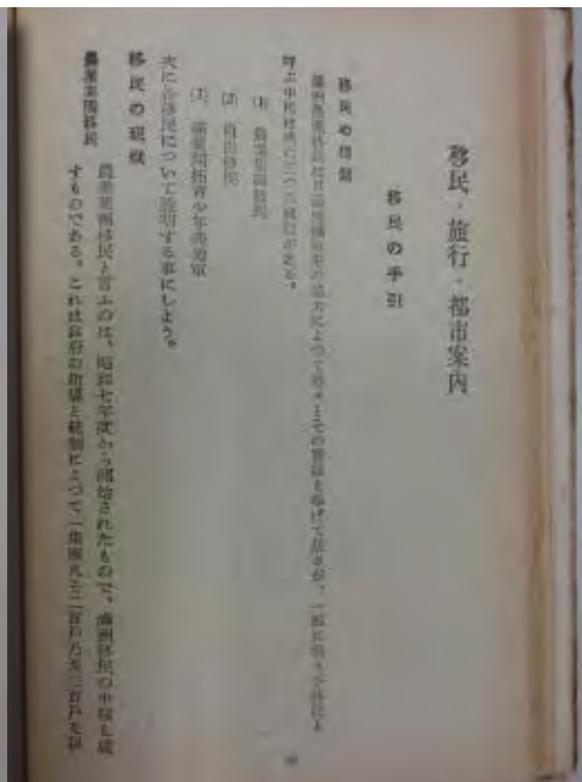
10 『満蒙の話』

11 文庫本サイズのガイドブック



では、擬似移民になって、この『満洲移民地視察案内』に従って進めていきたいと思ひます。  
これは松岡満鉄総裁が冒頭文を書いた小冊子ですが、写真で現地の状況を紹介しています。  
どれも幸せそうな移民が映っている写真です。住宅事情もちゃんと載せています。また他の情報もたくさん書かれています。





- 20. 『満洲開拓年鑑』
- 21. 『大陸視察旅行案内』
- 22. 『大陸旅行案内』



**関**連資料として『満洲読本』や『満洲開拓年鑑』のような出版物があります。詳しく知ろうと思えばいくらでも入手できます。『大陸視察旅行案内』も、あちこちで出されています。

『大陸旅行案内』の中で、ちゃんと移民のことを書いています。「移民の手引」で移民の経緯を説明し、農業移民、自由移民、また満蒙開拓団と分類して、どういう形で移民になれるかということを紹介しています。開拓局などの関連機関に申し込むと補助金が出るので、それをもって安住の地を探すということになっています。

23



『満支旅行年鑑』というものも出されました。その中で、まさに「大陸国策を現地に見よ」というツアーを組んでいます。隣は大阪商船の広告で、その横は各都市の紹介です。これで分かるように、全部が全部、農業関連ではありません。

もちろん満鉄も負けていません。24のような形で鉄道の紹介をしています。

さらに詳しく知ろうと思ったら、労働科学研究所から出された『開拓科学生活図説』があります。例えば満洲の人やロシアの人と比べてどう生活したらいいかということ、ちゃんと紹介してくれています。

さらに、中国語のテキストも用意しています。『渡満者必要 日満会話』、あるいは中国人とどうつきあったらいいか、という社交常識を紹介するものもあります。

24



25



26



27



23. 『満支旅行年鑑』

24. 『満洲の鐵道（昭和十四年版）』

25. 『開拓科学生活図説』

26. 『支那人との社交常識』

27. 『渡満者必要 日満会話』

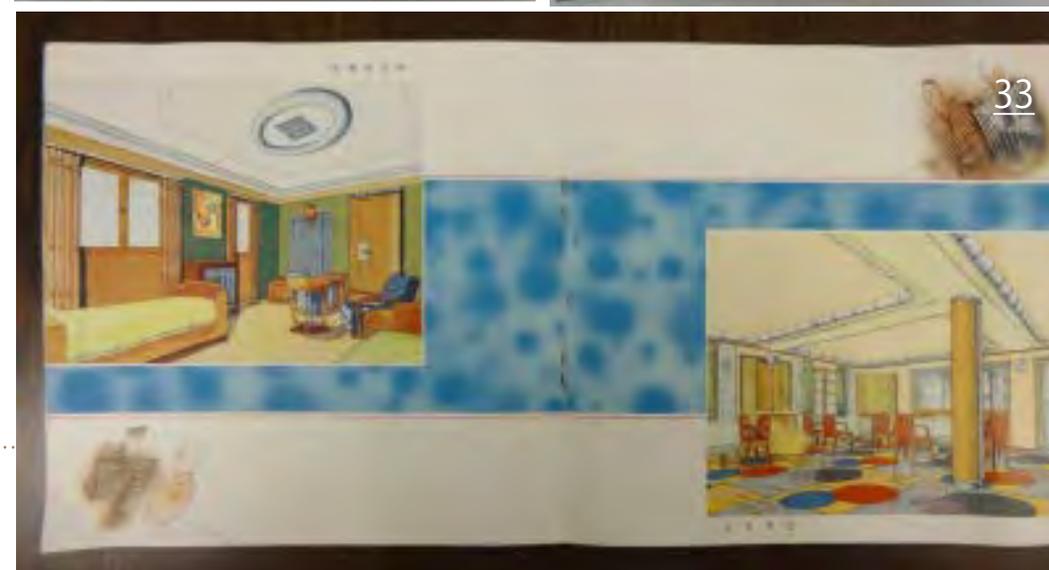


28-29. 『定期航空案内（昭和十年四月一九日）』

# 交通機関

Transportation

では、まず飛行機から紹介しましょう。恐らく皆さんは「ええっ？」と思われるでしょうが、  
でも、ちゃんとあります。「定期航空案内」を見ると、大阪から新京まで毎日飛んでいたのです。



もちろん、われわれは船で行きます。日満連絡船で、大阪商船によって運行されています。

31-33は、鴨緑江の鴨緑丸、日満連絡新造船となっています。船の中は、33のようにきれいに整備されています。

30. 『日満連絡船案内』

31-33. 『日満連絡新造船 鴨緑丸』



34. 『北鮮急航航路案内』



35. 『日滿新捷路 新潟—北鮮直航線 航路案内』

**急**いで行きたい場合は、近道も用意されています。新潟から北朝鮮に渡って、そこから満洲に行くという方法です。こういう新捷路、急行航路は各会社が競争して出していたのです。

36は「ふそう丸」、37は「はるびん丸」、そして38は「ほうてん丸」です。これでわれわれは大連港まで行きます。



36



37

36. 「ふそう（扶桑）丸」

37. 「はるびん丸」

38. 「ほうてん（奉天）丸」



38



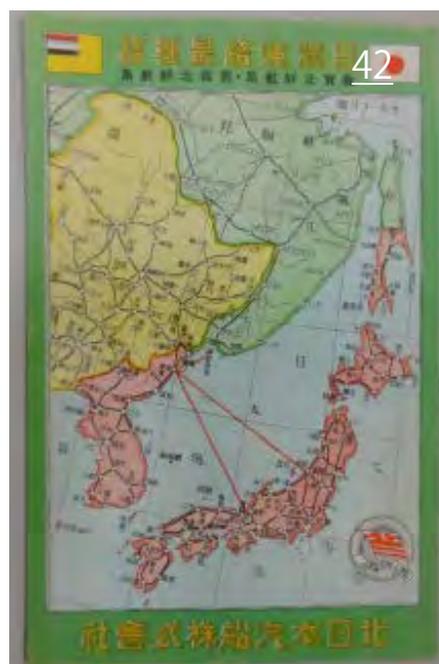
39



40



41



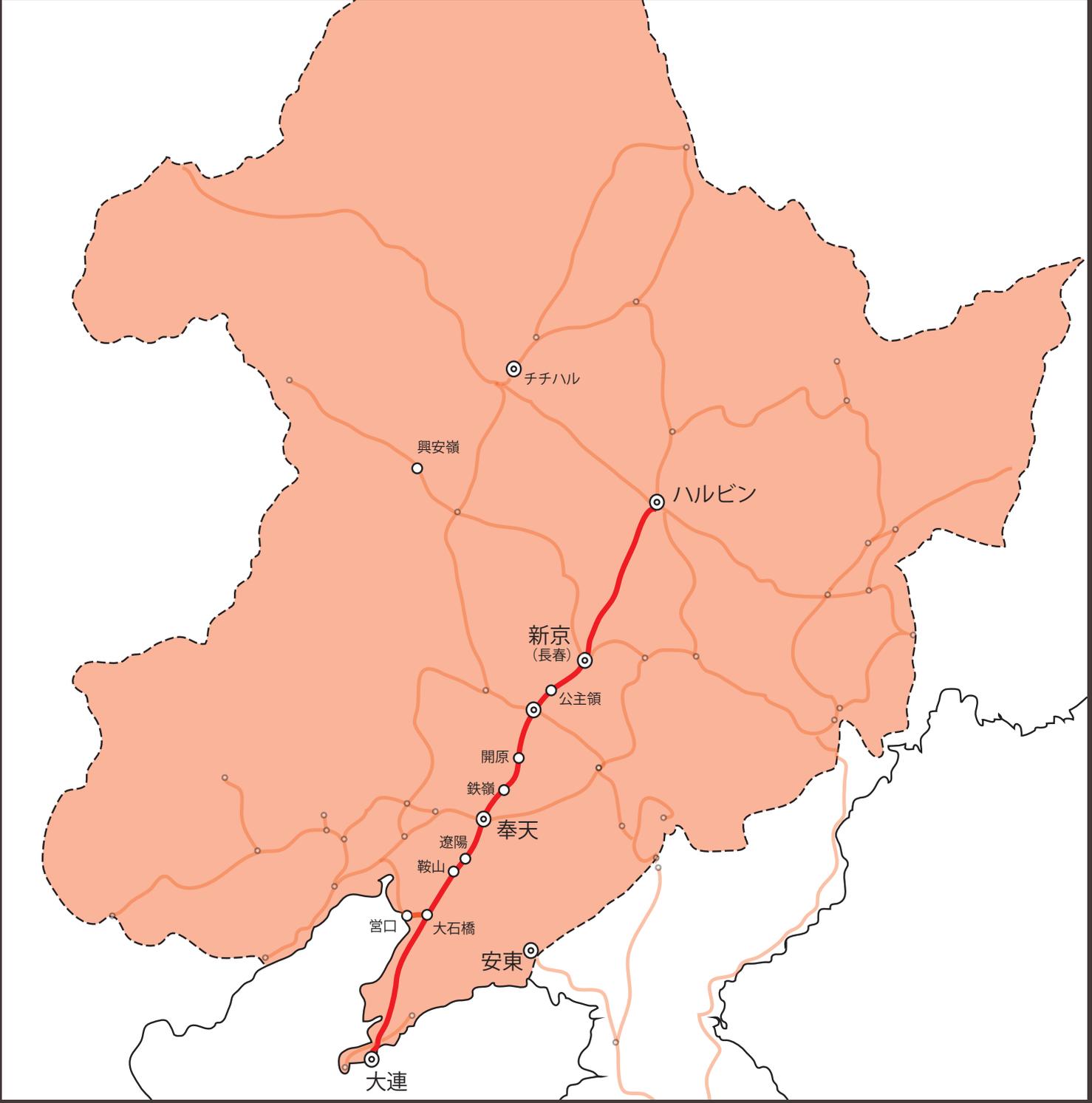
42

もちろん、大連港に着いてからもちゃんと案内してくれます。  
 も こういうホールになっていると、港の様子を紹介しています。  
 乗船したら必ずお土産がもらえます。記念繪葉書と、航路の紹介です。

39-40 『大連港案内』

41 「御乗船記念繪葉書」

42 「日滿連絡最捷路」

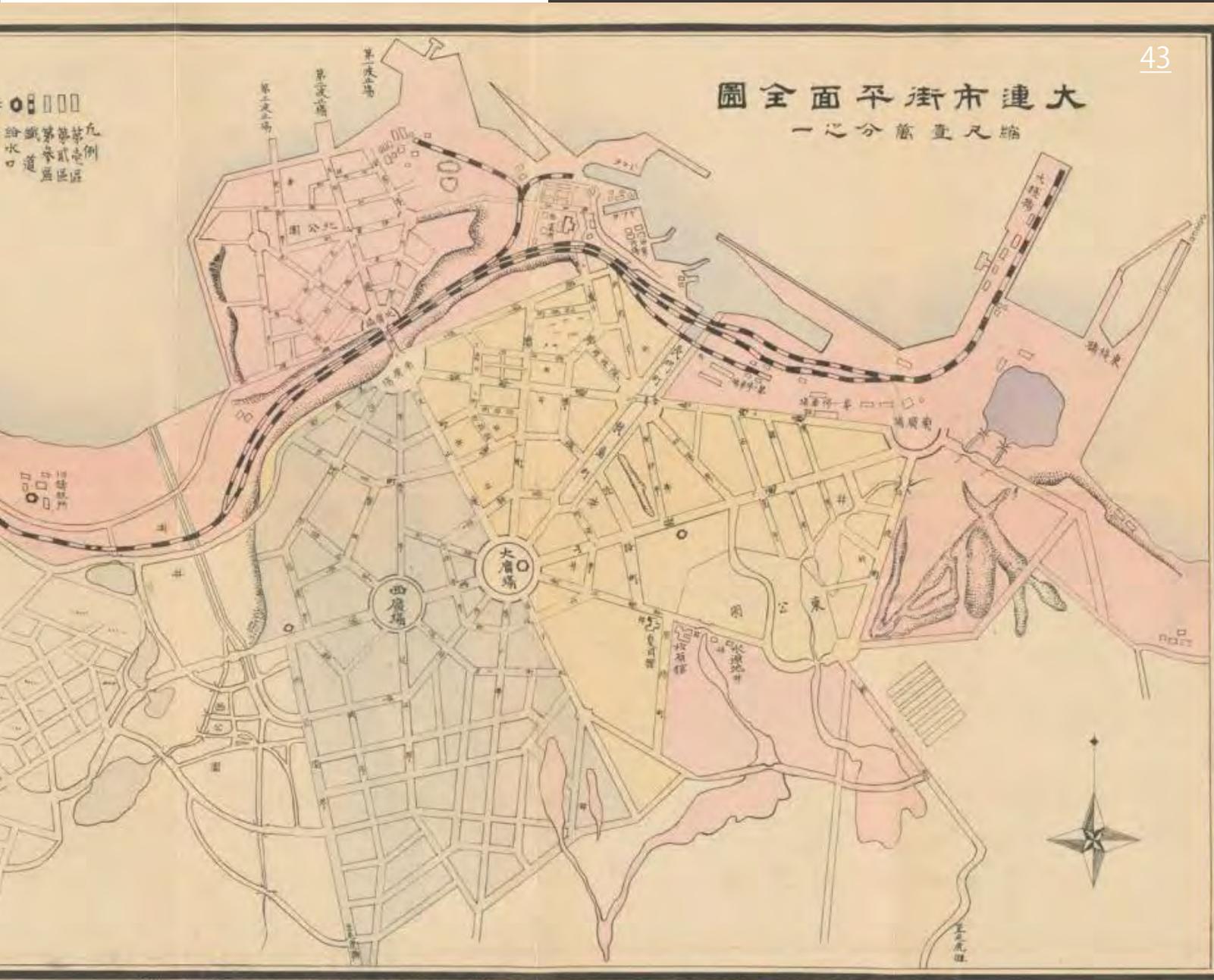


# 大連

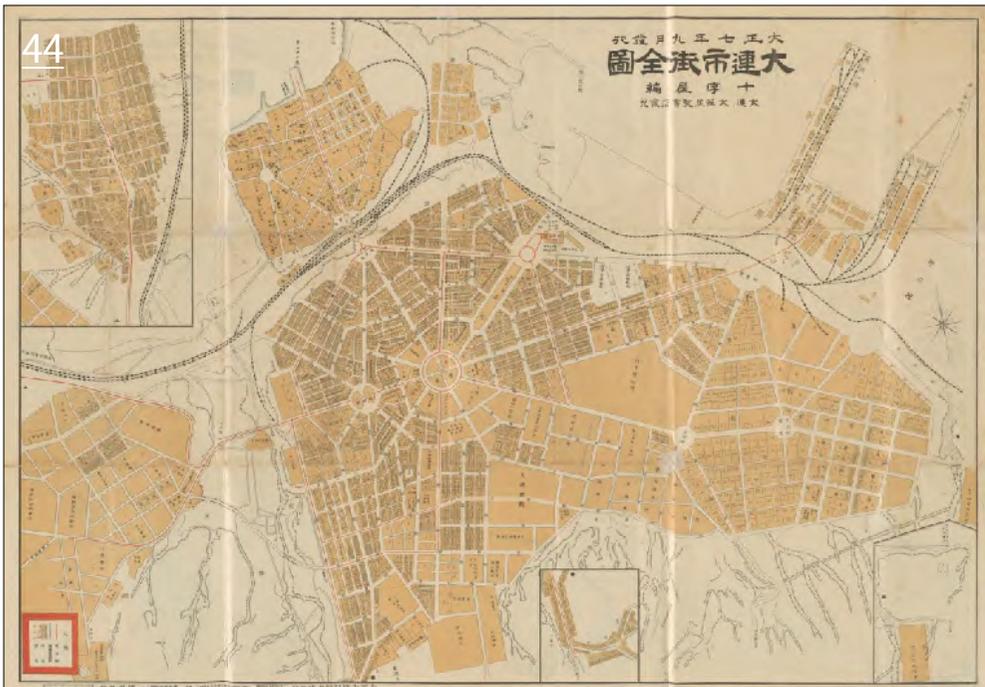
Dalian

では、大連はどうなっているかということですが、ここです。大連の歴史を復習しておきたいと思います。これは明治38年の地図です。ご覧いただくと分かるかと思いますが、中央に大きな広場があって、その先に駅があります。ロシア人が最初につくったのはこの港湾一円で、ここに政府の機関を集中させました。そして、このあたりに一般住民の町をつくりました。なぜこの形になったかというと、皆さん、どこか見覚えがないでしょうか。実はこれはパリをモデルにしています。19世紀当時のロシア人たちは、フランスに非常に憧れていた

ので、自分たちで町をつくる時にパリをモデルにしたのです。南ロシアから一番フランスに近い木まで持ち込んで、街路樹を植えました。ロータリーを中心に放射線状に道をつくっていきます。そうして広場と広場をつなげて、町全体を仕上げました。



43. 「大連市街平面全図」(1905)



大正7年の様子は 44 でわかります。だんだん市街が大きくなって、広場も増えていきます。つまり、日本人が完全にロシアのスタイルを踏襲して、どんどんまちづくりを始めたのです。真ん中に大きな公園をつくり、隣に中国人の町を開けました。

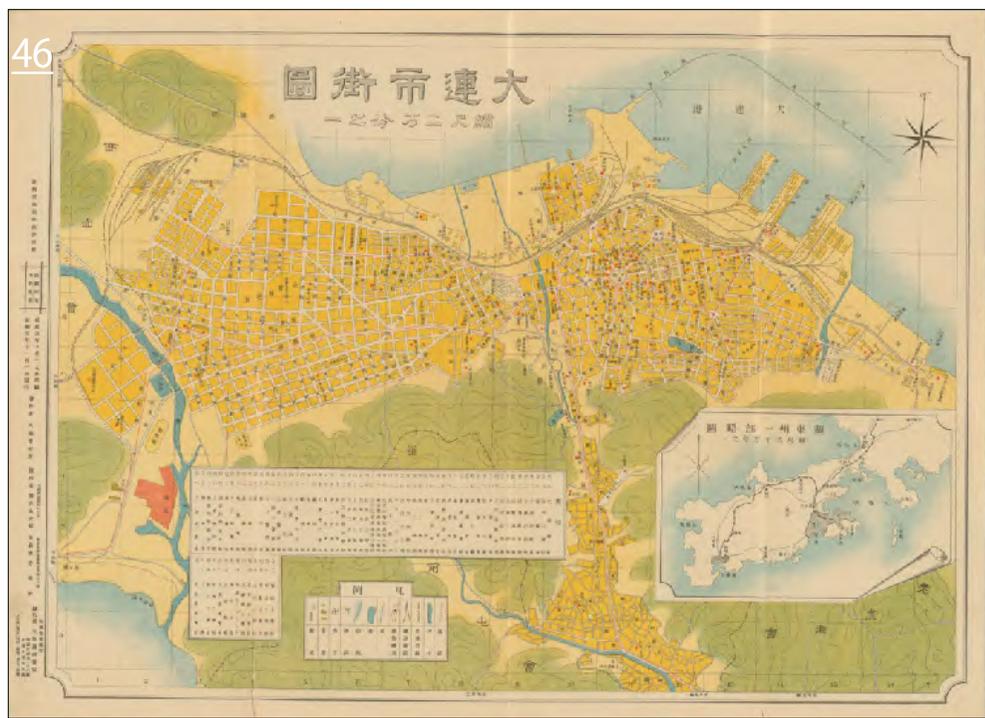
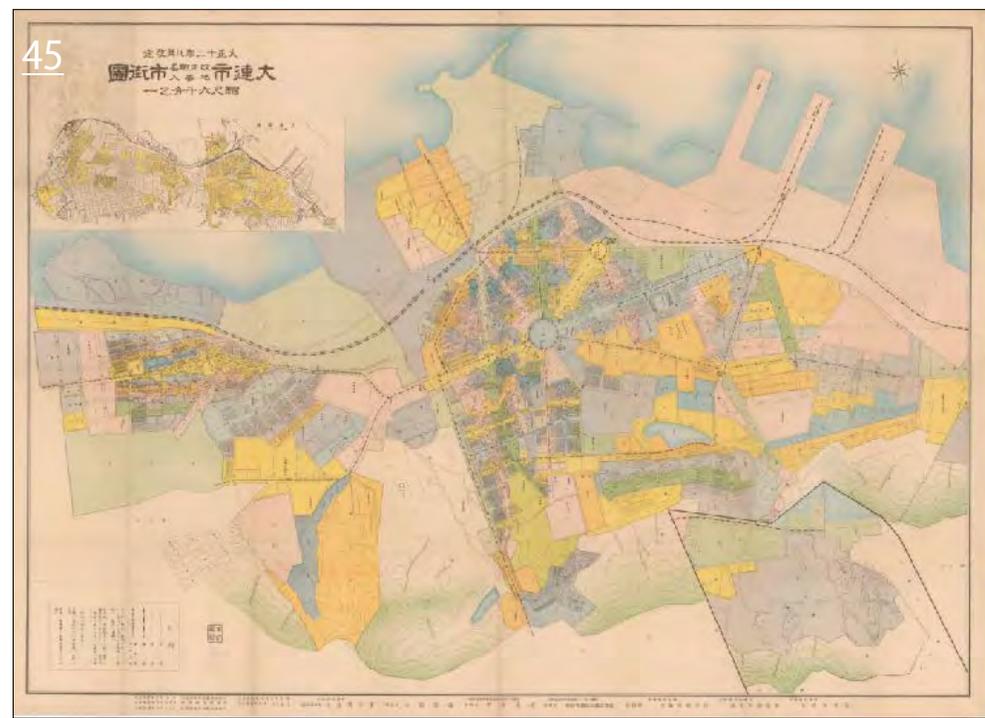
そして45のように、町がさらに広がっていきます。時間がないので省略しますが、こうして大連という町は成立したのです。

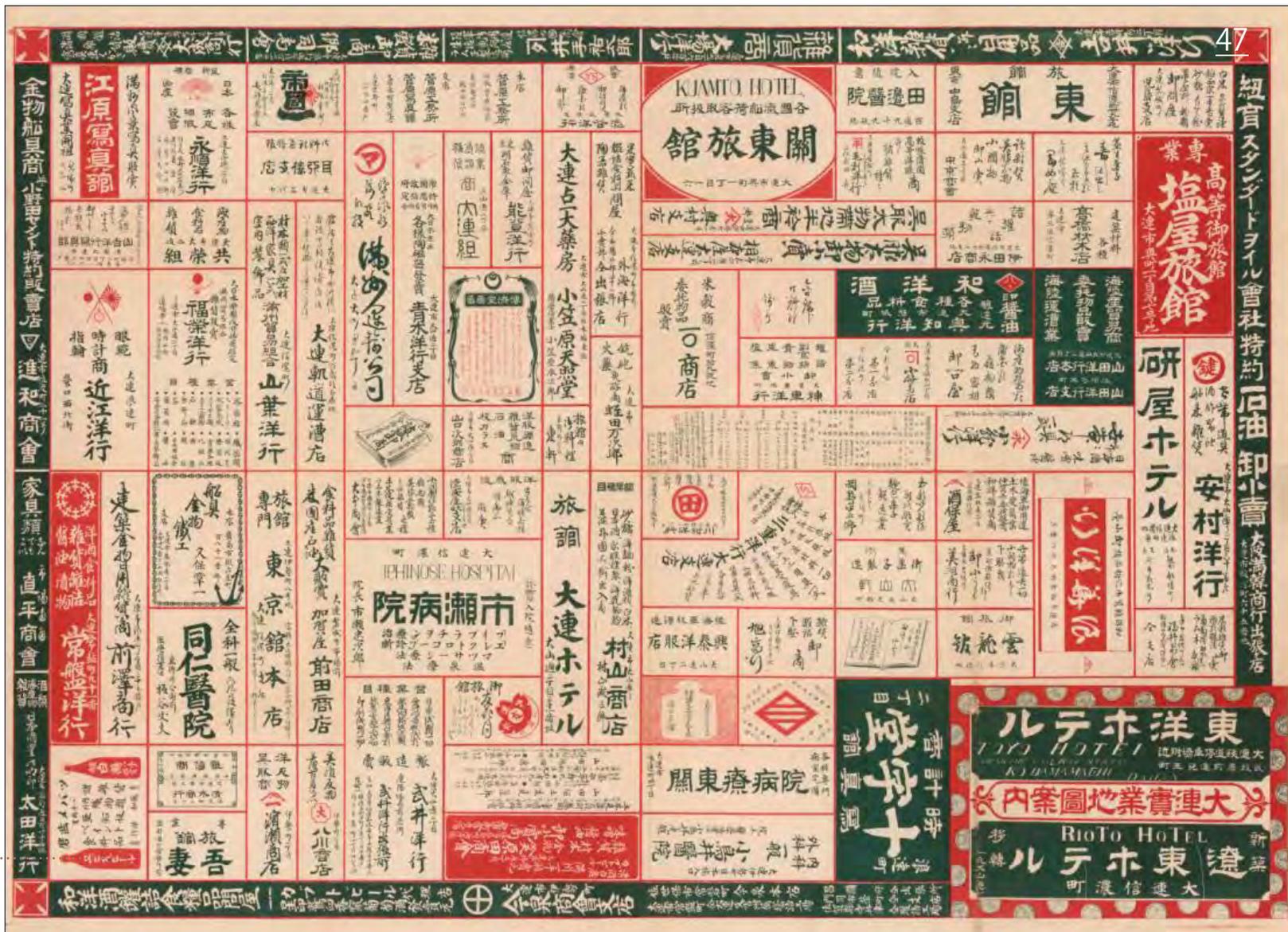
その後、昭和になると中国人町と工業地帯がいつそう拡大し、大連は単に商業の町ではなく、工業基地としても成立するようになりました。

44. 「大連市街全図 十字屋編」(1918)

45. 「大連市 改正町名地番入市街図」(1923)

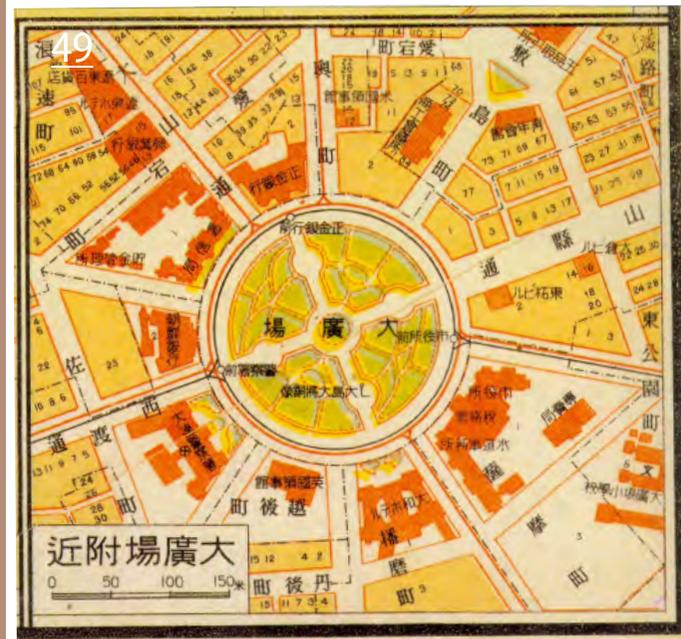
46. 「大連市街図」(1928)





47.「大連市街図」（1928）ウラ面

この地図の裏を見ると実に面白いです。これこそ商業移民の縮図と言えるでしょう。いろいろな広告を掲げていますが、その職種は実に多種多様です。もちろん統計を通して調べるという研究方法もありますが、こうして画像で見るとまた別のリアルさがあるかと思えます。



48. 大連中心部全景  
49. 「大広場附近」

**大**連の中心部です。行かれたことのある方はいらっしゃると思いますが、ロータリーを中心に、市役所、銀行、警察署（旧民政署）などが集まっています。角度としては、これはヤマトホテルから撮っています。権力につながる機関を大広場に集中させることで、一つの権威を作り出しているように見えるかと思います。

50-51はその建物の様子で、52はヤマトホテルです。真中の銅像は初代関東都督府総督の大島という人のものですが、今はもう残っていません。



50. 「輪奐美麗なる大連警察署」

51. 「大連市役所及大連民政署」

52. 「大広場に巍然たるヤマトホテルの偉容」



市場です。大きなデパートの近くに市場がつくられていました。それから、モダンな電気公園も大変立派に造営されていました。夏目漱石が大連に行ったときに、大変びっくりしたぐらいです。56は夜の電気公園です。



54

大連電気遊園温室  
Electric Garden, Dairen.



55

大連電気遊園地の景  
Electric recreationground Dairen



53

尖端を行く

大連新名所連鎖商店街の壮観である。二百の商店がそれぞれ売場の一つを引受けて、さながら百貨店を平面的に並べた明るい感じを現している。新しい市民の散歩街である。

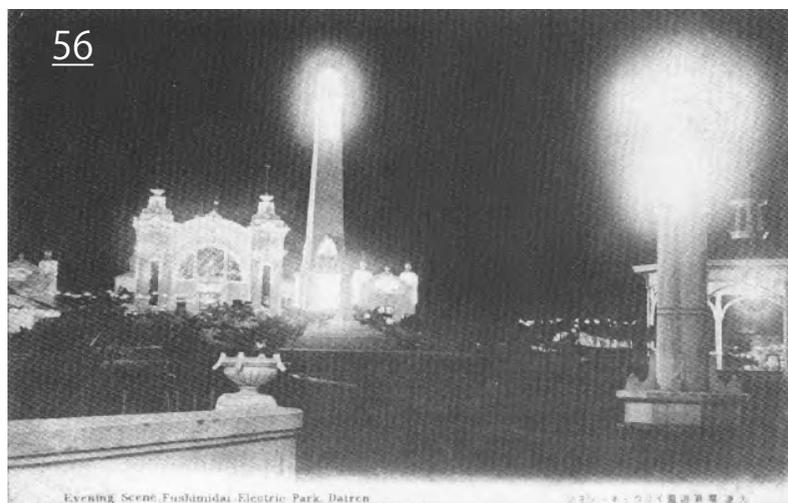
53. 「尖端を行く」

「大連新名所連鎖商店街の壮観である。二百の商店がそれぞれ売場の一つを引受けて、さながら百貨店を平面的に並べた明るい感じを現している。新しい市民の散歩街である。」

54. 「大連電気遊園温室」

55. 「大連電気遊園地の景」

56. 「大連電気遊園イルミネーション」



56

Evening Scene, Fushimidai Electric Park, Dairen

大連電気遊園地夜景

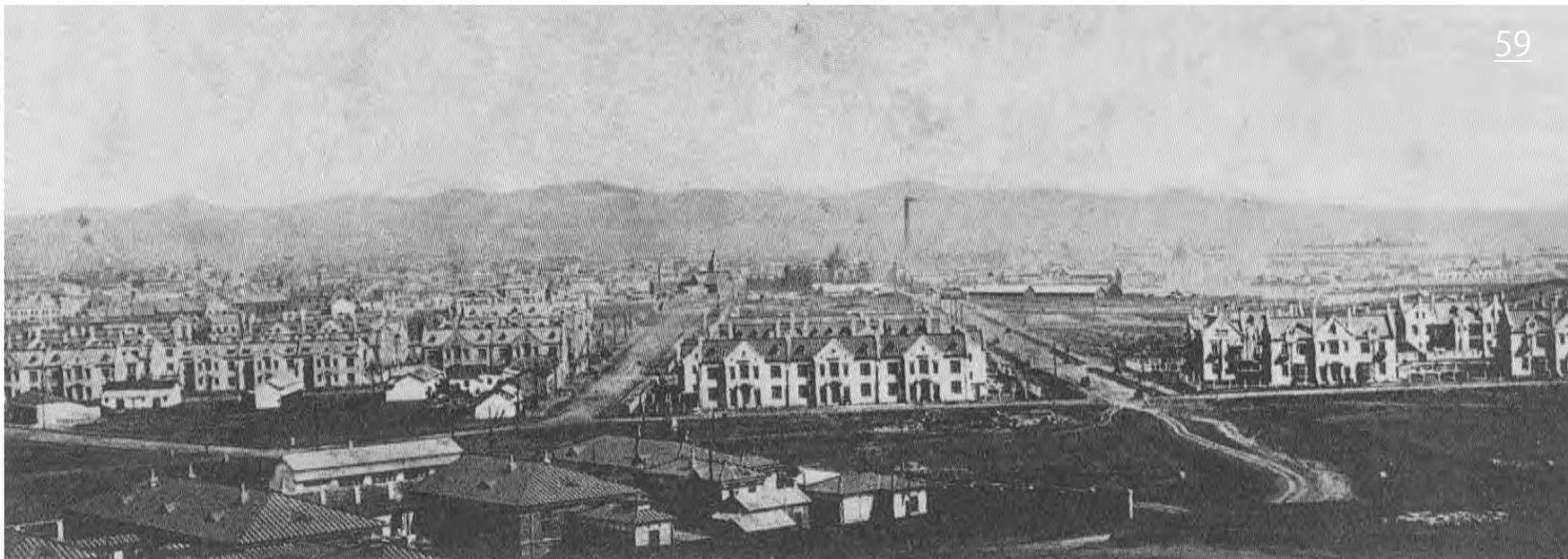


57. 「グレート大連の中枢地 車馬絡繹たる大連常盤橋通」

58. 「大連郊外星ヶ浦海岸ヨリ岬ヲ望ム」

59. 南満洲鉄道株式会社従業員用社宅の様子

これは大連の中心街と、海水浴場です。  
59は満鉄の社宅です。非常に立派です。





60

OF DAISEIKYO STATION THROUGED WITH PASSENGERS, DAISEIKYO.  
觀者乗客の賑ふ駅の停車場 (橋石大)



61

CHUOTAIGAI WITH WELL ARRANGED STREET, DAISEIKYO.  
街大中央たるた整置區街 (橋石大)

# 大石橋

Dashiqiao



62

BUSTLING SHOPPING STREET OF MANCHURIAN QUARTERS, DAISEIKYO.  
街人洲滿を々基人踏雜は列々軒店商 (橋石大)

ここからすこし満鉄沿線をたどって北上していきたいと思います。最初は大石橋の駅前と、租界地と中国人町です。それぞれ歴然と違います。

63 は宮口という町の租界地です。



63

VIEW OF THE NEW STREET, YING-KOW.

通街市新口營

- 60. 「乗車客の賑ふ停車場の偉観」
- 61. 「街区整然たる中央大街」
- 62. 「商店軒を列ね雑踏を呈する満洲人街」

# 宮口 Yingkou

63. 「宮口新市街通」

# 鞍山

Anshan



鞍山の駅前、それから満鉄の臨時用社宅です。  
66が病院で、67は独身者の社員寮です。非常に立派です。

- 64. 「鞍山仮停車場仮建物」
- 65. 「鞍山代用社宅」
- 66. 「鞍山満駅医院」
- 67. 「鞍山独身社宅」



68



68. 「鞍山集合社宅」  
 69. 「鞍山小学校校舎」

69



鞍山小学校校舎



これもけっこうびっくりさせられるものですが、68は今で言うマンションです。大きな一画が全て集合住宅になっています。小学校もこんなに立派にできています。



70

(二 其) 設 建 爐 鋼 鐵

- 70. 「鑄鉄炉建設（其二）」
- 71. 「南満洲湯崗子温泉清林館ノ一部」
- 72. 「南満洲湯崗子温泉玉泉館ト清林館ノ一部」



71

TANG-KNAG-TZU HOT SPRING NO. 4 都一ノ館林清泉温子崗湯洲滿南



72

TANG-KNAG-TZU HOT SPRING NO. 1 都一ノ館林清ト館泉玉泉温子崗湯洲滿南

**昭**和製鉄所がやや後にできますが、その近くに湯崗子（タンガンズー）という温泉地が作られました。

遼陽市街全圖

遼陽

Liaoyang

これは次の駅の遼陽です。ご覧いただいているのは旧城内の地図です。満鉄沿線は最初にロシア人がつくって、その後日本人がそれを接收して新しい町をつくっていくわけですが、大体、駅前は先ほどの大連方式でつくります。ロータリーを中心にどんどん近代的なまちづくりを進めるのですが、旧城内は元のままです。これを付属地がだんだんのみ込んでいくというところは特徴的です。最終的には全ての都市がそうってしまったのです。

73. 「遼陽市街全図」



74



76

(石川洋行蔵)

滿鐵醫院

(石川洋行蔵) 遼陽小學校



75

(石川洋行蔵)

遼陽東洋街

- 74. 「満鉄医院」
- 75. 「遼陽東洋街」
- 76. 「遼陽小學校」

74-76 は遼陽の満鉄病院と日本人街、それに小學校です。

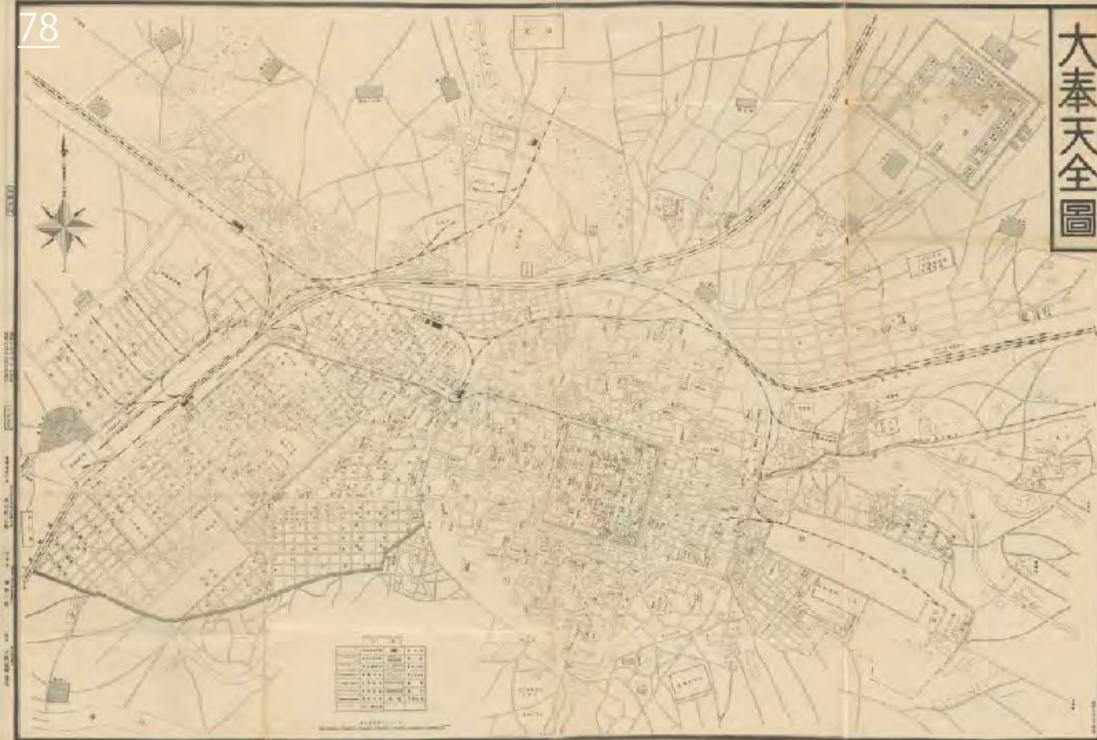
77

最新奉天市街図



78

大奉天全圖



79

奉天附屬地番地入図



77. 「最新奉天市街図」(1923)

78. 「大奉天全図」

79. 「奉天附屬地番地入図」

# 奉天

Fengtian

**奉**天も同じ構造です。これは旧城内です。附屬地は当初小さかったのですが、だんだんそれをのみ込んでいきました。

78の地図でそれがよく分かるかと思いますが、79を見ると、附屬地がこれだけ整然と、ロータリーを中心に展開されています。



**奉**天の市内です。81は駅前で、82はメインストリートの写真です。  
 中国人街になると、83のような形に変わります。  
 郊外には、ちゃんとハイキングのコースも用意されています。



- 80. 「日露戦役記念碑附近より浪速通り及び奉天駅を望む」
- 81. 「万客送迎する奉天駅(階上待合所)及び鉄西工場地帯の遠望」
- 82. 「浪速通り郵便局附近より奉天駅の遠望」
- 83. 「奉天小西関辺門人車の往来織るが如し」
- 84. 『奉天附近のハイキング案内』

# 鉄嶺

Tieling



北にさらに向うと、鉄嶺になります。  
85-86 は駅です。87 は小学校で、88 は公園です。

- 85 「鉄嶺駅」
- 86. 「乗降客夥しき鉄嶺停車場」
- 87. 「設備の完備せる鉄嶺小学校」
- 88. 「杏花爛漫たる鉄嶺公園」



89 「(開原名所) 開原拘鹿大街」

90 「開原二葉旅館」

91 「(開原名所) 開原駅貨物置場其二」

# 開原

Kaiyuan

これは開原という町です。90 は駅前のホテルです。  
 ここは物資の集散地で、91 は特産の大豆を積んでいるところです。



92 「公主嶺滿洲市街」

93 「公主嶺小学校」

# 公主嶺

Gongzhuling

これは公主嶺の街並みです。  
 93 は小学校です。強調しておきたいのは、どこの小学校も  
 大変立派だということです。

# 長春及附近現勢圖

縮尺是方尺十分之二

滿蒙配設圖

吉林省市略圖

哈爾濱略圖



長春商業會議所  
長春商會  
長春市議會

民國二十一年四月  
第一期事業五十年計  
自大同元年四月至慶德四年十二月



94. 「国勢現近附及長春」

95. 「国都建設完成近し 第一期事業五十年計画 自大同元年四月 至慶德四年十二月」

## 新京（長春）

Hsinking (Changchun)

長春も同じ構造です。附属地と旧城内で、後者がどんだのみ込まれていきます。

96-101 は、帝都、すなわち新京の当時の様子です。



96



99



97



100



98



101

96. 「新新駅」

「憧れの帝都」大満洲国首都の表玄関を飾る新新駅の堂々たる偉容である着車毎に憧れの帝都へ帝都へと押寄せる人波の盛況は実に頼母しい限りである。」

97. 「中央銀行前より電信電話会社を望む」

「文化は遍く」国都の中心である大同広場に面し宏荘を誇る一九三三年資本金五千万円の半官半民の経営にかかり有線無線の電信電話放送事業を営む。」

98. 「商埠地大馬路」

「織るが如く」城内旧市街の最も賑やかな通で、満洲人の商店軒を並べて繁栄を競ひ、人車輻輳して雑沓を極め濃厚な満洲情緒が湧き返って居る。」

99. 「大同大街」

「栄ゆる街景」大同大街は駅前から市の中央を貫く大通りで、近代建築の壮麗と砥の如き舗道、緑の線を引く街路樹の美しさはさすがに帝都の大動脈」

100. 「大同大街と孝子塚」

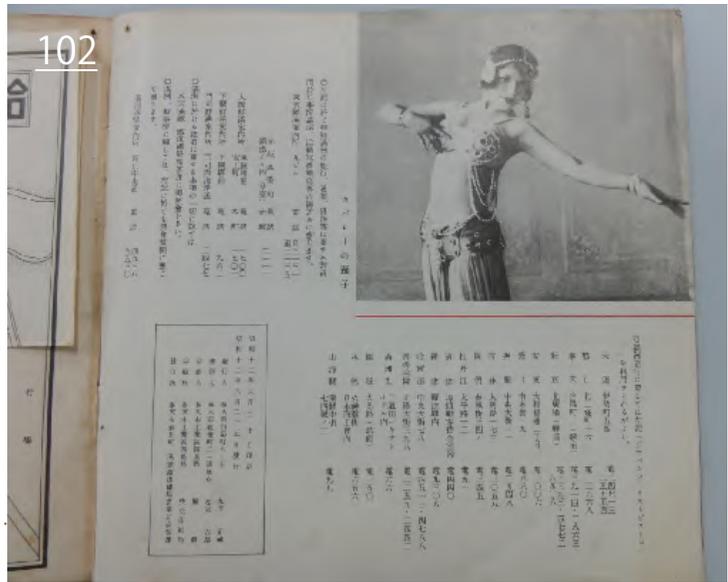
「(如かはれば)市の中央を一貫する大通りで近代建築の櫛比せる大同大街、其の一角にこれはまた異風景な孝子塚があり満人の敬信をあつめて居る。」

101. 「国務院」

「(儼然として)近代的な建築に満洲趣味を加味され新新の街に聞ゆる国務院こそは、躍進満洲帝国の進路を示す姿であり、更に市街美を飾る名物である。」

# ハルビン

Harbin



- 102. 旅行案内に掲載されたキャバレーの踊り子の写真
- 103. 「伝家甸中央大街」
- 104. 「新城大街よりモストリヤ街を望む」
- 105. 「伝家甸全景」
- 106. 『ハルビン附近のハイキング案内』



**長** 春をさらに北上するとハルビンにたどり着きます。そのハルビンで当時一番の人気者はロシア人の踊り子でした。

103-105のような近代的な街並みの中で、最初はロシア人、後に日本人がいろいろな事業を展開していったのです。

また、ハルビンの郊外でもさまざまなハイキングコースが用意されました。

# チチハル

Qiqihar

チチハルはちょっと遠い町ですが、107のようにここでも立派な駅がつくられています。小学校も 108のように、相当モダンな造りです。



107. 「(牡丹江名所) 牡丹江駅」



108. 「(牡丹江名所) 日本人小学校」

## 興安嶺 Xinganling

興安嶺に行くと、釣りの話もできます。

109. 『興安嶺附近 釣魚の話』



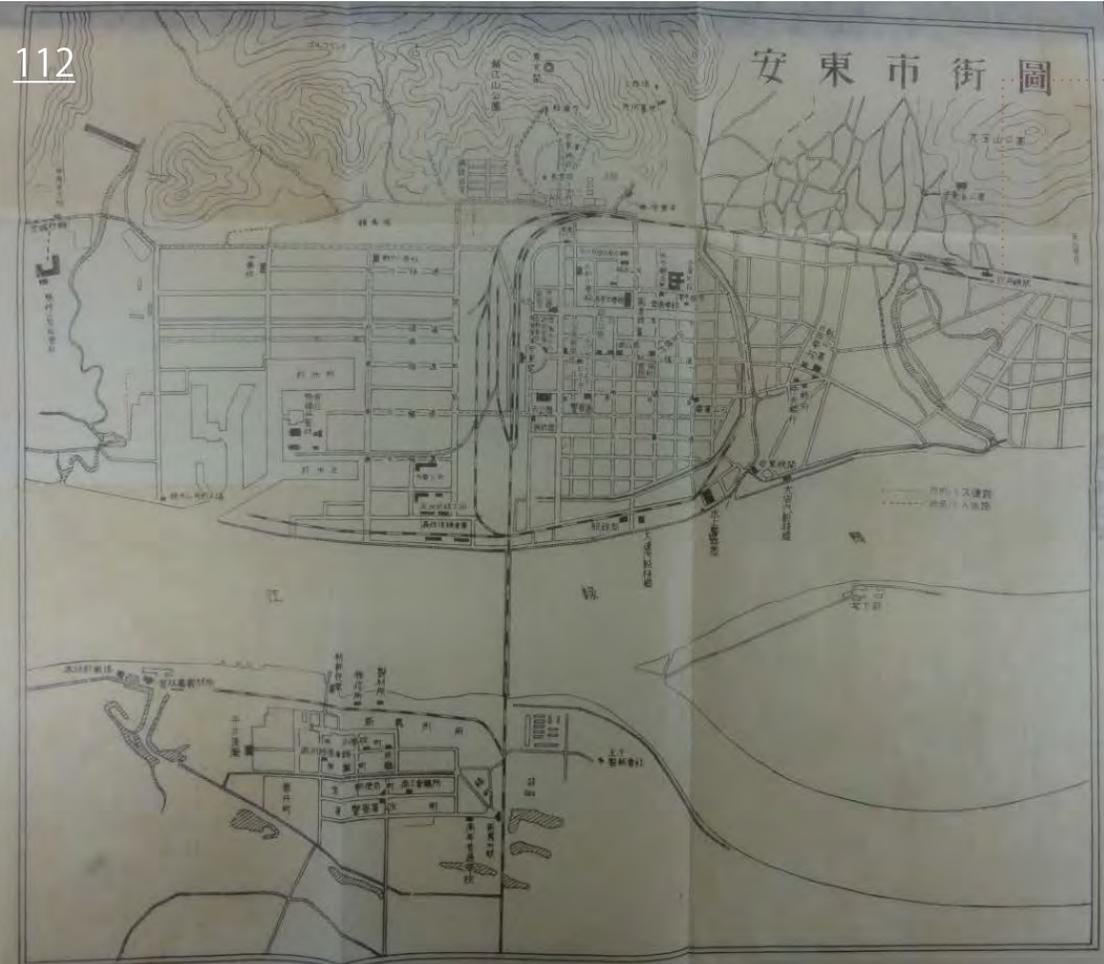
- 110-111 満洲みやげ御案内
- 112. 「安東市街図」
- 113. 「(安東県) 江上に市街をなせる鴨緑江流筏の群集」

# 安東

Andong



112



ハルビンを終点に折り返し帰路に着けば、われわれの旅も終わりに近づきます。  
そして最後にたどり着くのは安東という町です。これは朝鮮との国境の町で、ここを渡ると日本に戻ってきます。

113



擬 似の旅が終わったところで、満洲の移民たちが営んでいた事業を少しだけご紹介します。一つは森林の伐採です。多くの木材会社が入っていて、木材の輸出をおこなっていました。

大豆のことは先ほどもう話しましたが、もう一つはアヘンです。北満ではアヘンの栽培が非常に盛んでした。満洲が近代的な空間として成立できたのは、実は川と天候によるところが大きいです。冬になると川や大地が全部凍るので馬車が非常に通りやすく、大豆や木材を運ぶのに大変便利です。周辺農村から駅まで馬車で運び、駅から港まで汽車で運んで輸出するというのが満洲の経済の仕組みです。特にヨーロッパに向けて大豆等を輸出していました。

この他、娯楽としては、116-117のように相撲大会や洋画の展覧会なども開かれていました。



114

114. 「遼河水上の橋」

115. 阿片の収穫をする少女

116. "新京記念公会堂"で行われた美術展の様子

117. "全満相撲大会"の様子



115

同江口采收鴉片的姑娘  
偽滿时期的东北，从海拉尔到昂昂溪，从黑龙江到松花江到处是  
罂粟。据记载：黑龙江种植鸦片5万顷，每亩收成割15斤计算，每  
斤价按20元计，每垧地种植鸦片的价值大约在300元左右。而种粮食  
每垧地价值只有37.5元左右，由于有利可图，这里的农民纷纷弃粮  
食生产转而种植鸦片，成为烟农。

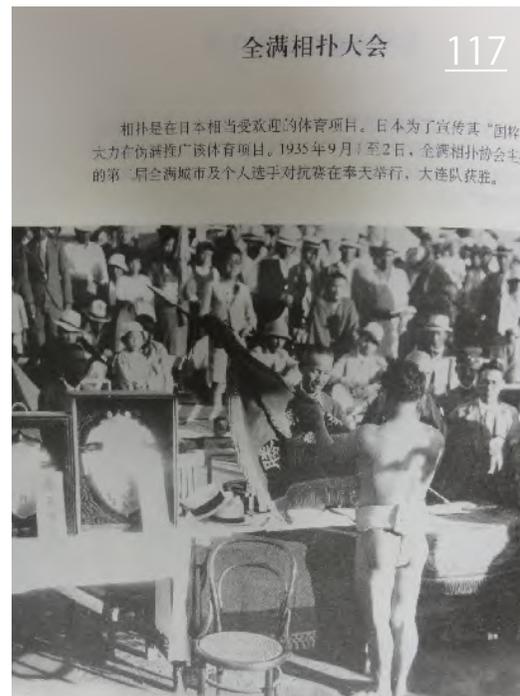
1924年8月“画道社”记者拍摄的采收鸦片情形。



116

“新京”美术展览会开幕

由“新京”美术协会主办的伪满第一次“新京”美术展览会于1935  
年11月9至11日在“新京”纪念公会堂二楼举行。



117

全满相扑大会

相扑是在日本相当受欢迎的体育项目。日本为了宣传其“国粹”，  
大力在伪满推广该体育项目。1935年9月1日至2日，全满相扑协会主  
办的第二届全满城市及个人选手对抗赛在奉天举行，大连队获胜。

## 産業・文化

Industry, Culture

## まとめ

最後に、すこし話をまとめてみたいと思います。今まで満洲のことを考えるとき、どうしても近代、あるいは国家という概念で捉えてしまうため、いつも二つの結論しか出てきません。植民地の工業化等によって近代化が進みました。その成功を見て、いいことをしたという近代化論と、いや違う、植民地への搾取による収奪だったのだという相反する二つの議論です。実は、この二つは表裏一体で、簡単にどちらかとはなかなか言いにくいのです。つまり、これは近代そのものの両義性に関わる問題です。ここで宗主国と植民地がすでに一体化しているのです。宗主国と植民地の共時的、横断的、重層的な構造です。重層的というのは、日本の内部にも階級性があり、きびしい上下関係が存在しているからです。

そしてこういう研究をすることによって、その間の人的な移動が分かります。われわれがこのような画像資料などを検証することで、当時の帝国域内でどのような文化現象があったのかをはっきりと可視化することができます。

特に満洲の場合、移民はもともと帝国の体現者です。しかし、日本帝国の代表者であると同時に、実ははみ出したというか、余計者でもあります。そういう二重の身分があるということを、ぜひ理解してほしいのです。彼らの足跡をたどることは、つまり近代日本とは一体何であるかということ逆照射する意味合いも持っているのではないかと思います。

以上です。ご静聴ありがとうございました。

人間文化研究機構 国史館 国史資料館  
 国史資料による日本人移民への前見 満洲・アラル  
 2019年10月17日(木) 14:00～16:00

### 2. 満洲の概況

- ・清王朝の父祖の地
- ・長きにわたる封禁政策
- ・滿、蒙、鮮、露などによる移民の
- ・日露戦争の対象
- ・張作霖、張学良らによる統治と
- ・満洲国の成立と華境
- ・中国最大の工業基地
- ・日本の約3倍の土地と約半分の

II

ブラジル

Brazil

# 両角貫一コレクションが捉えた日系ブラジル移民の暮らしぶり

**細川 周平** HOSOKAWA Shuhei

国際日本文化研究センター教授 Professor, International Research Center for Japanese Studies

**根川 幸男** NEGAWA Sachio

国際日本文化研究センター外国人研究員 Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

ブラジリア大学准教授 Associate professor, University of Brasilia

**細川** 細川周平です。劉さんの話を聞いて一言言いますと、僕の父親は旅順高校に行っていましたが、1学期で帰ってきました。というのも、教練が厳しいのと、それから軍人が威張っているのが嫌だということで、1学期だけいて、夏休みになると船に乗って帰ってきたのです。大阪に住んでいたのですが、半年浪人して、日本国内の高校に通ったということで、旅順は僕にとって前々から親しい場所でした。

そして、10年ほど前に新京、今の長春に2回ほど、1カ月ずつ滞在することがありました。そのときは1等寝台車に乗って大連に行き、ヤマトホテルに泊まり、それから先ほど出てきた電車に乗って電気公園に行ったりと、戦前の観光客と同じようなことをしましたし、奉天でも確か旧ヤマトホテルに泊まった記憶があります。ハルビンでも、ロシアの建物のレストランに行ってロシア料理風のを食べるなど、今の観光客と70年前の観光客とではやっていることがそれほど変わらないかもしれません。

今、思い出しましたが、大連ではダンスホールを見に行くということが僕のテーマの一つでした。奉天でも行きました。日本のダンサーが、あるいはジャズミュージシャンが満洲に行くということを調べていたことがあって、そんなところにも行きました。新京では映画撮影所にも行きました。満洲のハリウッドと言うと大げさかもしれませんが、映画を作っている場所があって、そこを見学しに行きました。李香蘭の幻影などを追っていたのです。

われわれのテーマと少し関係づけて言うと、ブラジル移民は1908年(明治41年)に始まります。日露戦争の後、日本国内の工業化、そして農村の疲弊などを原因に南米への移民を模索し、その中でブラジルが受け入れてくれるということで約780名の移民が初めて渡ったのが1908年です。同じ年には北米が、もう日本移民は要らないというような排日的な紳士協定を出して、日本は南米に移民を送ろうとしていました。同じころに満洲へも送ろうという話もあって、両方が並行して進んでいました。

ブラジル移民が本格的に始まるのは、1924年(大正13年)に米国の排日移民法によって新たな日本移民が受

け入れられなくなり、その新たな受け入れ先として日本国とブラジル国が協定を結び、そこに国策移民が始まってブラジルの日本社会は急発展します。それまでは年間数千人だったのが、1925年から34～35年にわたり、7000～8000人から多いときで確か2万5000人ぐらいの人間が渡っています。

しかし、ブラジルでも排日的な法案が1930年代半ばから続々と打ち立てられます。ブラジルが国粋主義であることや、1933年の日本の国際連盟脱退が大変大きなきっかけとなって、ブラジルが連合国側にだんだんついていき、そのころからブラジル移民は減っていきます。そして、満洲がもう一段階、本当に高い可能性のある場所だということで報道され、実際に、先ほど見たように開拓団が組織されるなどして成長していくわけです。

そういう時期にあって、実はブラジル移民の中でも、私たちは既に外国生活に慣れているから満洲に再移住しようという話が1935年以降に出てきます。実際にどのくらい行ったのかは分かりません。戦後になると満洲からの引き揚げ者が日本に現れます。1950年代からブラジル移民政策がまた始まると、その引き揚げ者の中からブラジルに渡った人もかなり出てきたようです。ただし、これも統計がなく、あいにく社会学者もほとんどそんなテーマに興味を持たなかったために、実態は分かっていますが、戦後移民にはかなりいるようです。

そういうことで、満洲移民とブラジル移民は全くかけ離れた話というわけではありません。根川さんは写真を集めてくださった方ですが、今日のお話をどうぞお願いします。

**根川** 皆さん、こんにちは。ブラジリア大学の根川と申します。日本生まれで、1996年にブラジルに行きましたが、私も戦後のブラジル移民の一人と言えるかもしれません。

今、細川先生から、特に戦前期を中心にブラジルの日本人移民の歴史について簡単にご説明いただきましたが、皆さんのお手元に参考資料として「ブラジル日本移民および子弟教育史の略年表」というものがありますので、そちらをご覧くださいながらお話を聞いていただきたいと思います。

## 両角貫一(もろずみかんいち)コレクション

**根川** 子弟教育史を年表の中心に据えたのは、実は今日で紹介するのは両角貫一さんという方のコレクションなのですが、この両角さんという方が学校の先生だったからです。「もろずみかんいち」という、ちょっと難しい読み方ですが、この方のコレクションです。これは、私が2011年に人間文化研究機構の研究プロジェクトの一環としてブラジルでフィールドワークを行ったときに、両角貫一さんのお嬢さんである寿弥子さんという方から提供された2冊の写真帳に整理された99枚の写真が中心になっています。

この写真のキャプションから判断しますと、1939年6月から1941年9月ごろ、つまり太平洋戦争直前期のブラジルの日系人、あるいはサンパウロや首都リオデジャネイロの風景、それから両角さんの家族や友人たちを中心とした日系人の生活が撮影されています。娘さんの寿弥子さんのお話や写真の書き入れなどから、どうやらこの写真はCONTAX F2という、私はカメラにあまり詳しくないのですが、こういうカメラによって撮られたということですね。

ご覧いただいている写真の、前列の右から3人目に、細くて色の白いモーニングを着た青年教師がいらっしゃ

いますが、彼が両角貫一さんです。これは1937年、彼がブラジルで最も古くて伝統のある、大正4年に創立した日系の大正小学校の校長先生をなさっていたときに撮られた高等科の卒業式の写真だそうです。これはもちろん両角さんが写っているので、「両角コレクション」の中の1枚ではありません。

## 両角貫一氏の略歴

**根川** 両角貫一さんは、1906年（明治39年）に長野県諏訪郡永明村（現茅野市）でお生まれになりました。1927年に、現在の信州大学教育学部に当たるのでしょうか、長野県立師範学校を卒業しました。この年に、現代風に言うところ長野県の国際交流協会になるのでしょうか、信濃海外協会が、ブラジルだけではなく海外移民を推進していたわけですね。その信濃海外協会が募集した、ブラジル派遣の教員留学生の第1回に応募します。そして、首尾よく彼は採用されて、1927年に県立師範学校を卒業後、翌年の1928年には信濃海外協会ブラジル派遣教員留学生第1期生としてブラジルに渡航します。さらに翌年の1929年に、サンパウロ郊外と言ってもいいと思うのですが、サンパウロから車で3時間ほど行ったところにカンポス・ド・ジョルダンという、ブラジル日本人が「ブラジルの軽井沢」と呼んだ避暑地があります。細川先生はおいでになられましたか。

**細川** いや、行ったことはありませんが、そこには結核の療養所があって、たくさんの文芸の人がそこで書いているので、一度行ってみたいと思っています。

**根川** そのカンポス・ド・ジョルダン、「ブラジルの軽井沢」の玄関口になるのがピンダ・モンニャガーバという発音の難しい町なのですが、両角さんはその師範学校に1929年に入学して、1932年に卒業します。ブラジルに行った同期には、清水明雄さんという、やはり長野県の方がいました。この時点で彼は、ブラジルでも世界でも唯二のブラジルと日本両方の師範学校を卒業した、すなわちブラジルと日本両方の小学校の正規の免許状を持ったエリートという存在になります。

そして、一時期は日本に帰っていた時期もあるのですが、1930年代の初めごろにサンパウロ州内陸部の小学校で教員として活躍して、1935年に、先ほどご紹介したブラジルで最も古いと言われている日系の大正小学校の校長先生として就任します。まだ27～28歳の青年教師です。

先ほど劉先生から満洲のお話がありましたが、ブラジル移民と満洲移民は時代をややずらしながら平行に進行した現象です。日本を中心に置いて、二つの現象が平行に進行しています。



大正小学校高等科卒業式にて、両角貫一氏（最前列右から3番目）

### 両角貫一／もろずみかんいち（1906～1996）

長野県諏訪郡永明村（現茅野市）生まれ

1927：長野県立師範学校卒  
（日本力行会会員）

1928：信濃海外協会ブラジル派遣教員  
留学生としてブラジル渡航

1932：ピンダ・モンニャガーバ師範学校卒

1935：大正小学校校長就任

## 「蒼氓」的・移民史観

**根川** 1935年といいますと、日本では石川達三という作家が、お読みになった方がいらっしゃるかもしれませんが、『蒼氓』という小説で第1回芥川賞を受賞しています。向かって左の写真ですが、石川達三さんは1929年から1930年にかけて、らぷらた丸の移民助監督として何百人かの移民たちとブラジルに渡ります。この『蒼氓』という小説は、彼のブラジル移民体験をベースにして、ブラジルに渡っていく当時の日本人移民たちの姿を書いたものです。

こうしたブラジルに渡る移民たちの『蒼氓』で描かれた姿は、日本という国家に捨てられた貧しい、弱々しい田舎者の日本人移民という非常にマイナスなイメージで語られることが多いです。われわれはやや批判的に、そういったブラジル日本人移民たちの見方を「蒼氓」史観と呼んでいます。

その「蒼氓」史観ですが、例えば、この中にもご覧になった方がいらっしゃるかと思いますが、2008年はブラジルから日本人が移民して100周年に当たる、ブラジル日本人移民100周年の年でした。先ほどの細川先生のお話にもありましたが、「ハルとナツ」というブラジル移民を題材にしたドラマが日本でも放映されました。

ブラジルのコーヒー農場で最底辺の契約労働者として白人の監督に追い使われるというような、弱者としての日本人移民というイメージがどんどんと再生産されてきたのです。



(左) 移民船上の石川達三（最前列右端）  
（国立国会図書館ウェブサイト  
「ブラジル移民の100年」より）  
(右) 『蒼氓』（新潮文庫版）



## ブラジル日本人移民の豊かな趣味生活

**根川** 実は1930年代に、最も多くの日本人移民が移住した時代のサンパウロはどんどん都市化が進み、ニューヨーク、あるいはパリと並ぶ大都市になっていきます。その中で、数は少なかったのですが、日本人がサンパウロに移り住み、豊かな趣味生活を送るようになります。

**細川** サンパウロが一種のブームタウン、巨大になっていく過程にあったということをおよそと申しますと、1900年の世紀の初めには24万人だったのが、20年後には58万人ですから2倍ちょっとですね。そして、1940年には133万人ですから、6倍の人口になっています。ちょうど日本が開国したころに、神奈川村が横浜になってどんどん大きくなっていきました。神戸も同じですが、そうしたペースで巨大化していったのです。

その大きな原動力になったのが、19世紀末のコーヒー農園です。コーヒーを飲むという習慣が国際的に広がり、そのモノカルチャー（単一栽培）で富裕層が生まれ、その下には中間層が生まれるという形で、どんどん大きくなっていったわけです。1920年の統計では、日本人がこれから増えるというときには35%が外国人でした。つまり、新しく移住してきた人数の35%、3分の1が外国人だったということです。その多くはイタリア人で、町の真ん中で聞こえてくるのはイタリア語が主だったという記録が幾つも残っています。そういう中に日本人が飛び込んでいったのです。

**根川** そうした1920年代から、特に1930年代にかけてのブラジル日系人、特にサンパウロという大都市における日本人の豊かな趣味生活の一つとして、今日は「両角コレクション」を紹介していきます。

1935年に、聖美会というブラジル最初の日系芸術家の組織が結成されて、多くの日本人移民画家たちが活躍するようになります。右上の画像は、半田知雄という聖美会の創立者の一人が描いた作品です。

**細川** 聖美会というのは、サンパウロのことを「聖なる市」と呼びますが、サンパウロの「サン」、つまり「セント」から「聖」と書くことがあって、その「美」の「会」という意味です。その時代、ブラジルでは近代画家、近代美術がぐっと盛り上がって来るといふときで、その人たちとも交流があった美術の会です。

**根川** 下の左右にあるのは「伯刺西爾時報」という、1910年代後半からサンパウロで発行された日本語新聞の広告です。このような都々逸がコピーに使われたり、左の方は日系のカメラ屋、写真屋の広告ですが、写真を趣味とするような日本人移民たちも現れていたということです。それでは、そろそろ「両角コレクション」を実際にご覧いただきましょうか。



聖美会創立者・半田知雄氏の作品

FOTOPTICA  
S. PAULO-R. S. BENTO 48-CASA, 2000

各種カメラ、シネ撮影  
映寫機及寫真材料藥品  
——日本文商報進呈—— 貴園盛會歡迎——  
引此の廣告一枚を二十枚の寫真材料に交換する

「ペビー・ボックス」小形新カメラ  
ボディ、マストライウム専用 十六枚撮り  
七十五針レース フイルム三針六百レース

スカフボーベ  
CASA FOTOPTICA  
RUA S. BENTO  
SÃO PAULO  
PECAM CATALOGO

5 10 35

酒は涙か東キリン  
心のうさのコップ酒

即席上かんに致します  
ワンコップ ニミル  
大黒屋  
大須賀商店  
アロビア街一五三

「伯刺西爾時報」広告

## 大正小学校の修学旅行

**根川** まずは大正小学校の修学旅行の方からです。先ほど申しましたように、両角貫一先生は大正小学校の校長先生でした。1930年代後半というのは、日系人たちが経済力を付けて、ブラジル各地に日系小学校がたくさん開設されるわけですが、そのブラジル各地の日系小学校、特にサンパウロ州の日系小学校の間で修学旅行が盛んになる時期です。大概のサンパウロ州の学校は、州都であるサンパウロ、そして国際貿易港であったサントスを目指したのですが、サンパウロ市にあった大正小学校の修学旅行は5泊6日ぐらいで、首都のリオデジャネイロに行ったようです。ご覧いただいている写真は、1939年8月の大正小学校の修学旅行で、キャプションによると「リオ博物館」と書いてありますが、恐らくこれはリオの国立博物館です。現在も残っていますが、ドン・ペドロ・セグンドというかつての――。

**細川** 独立において大事な人ですね。

**根川** そうですね。ブラジルはブラジル連邦共和国になる前は帝政を敷いていたのですが、その二代目皇帝の像の前で撮った記念写真です。

**細川** 制服を着ていることにもご注目いただきたいですね。日本風の制服です。田舎の方では、分校や村学校、塾のようなものでしたが、大正小学校は日本人街の真ん中にあり、制度的にも一番整備された学校だったのです。そこの校長先生ですから、こちらで言うと高倉小学校校長みたいになるのか、ちょっと分かりませんが、そんなところでしょうか。

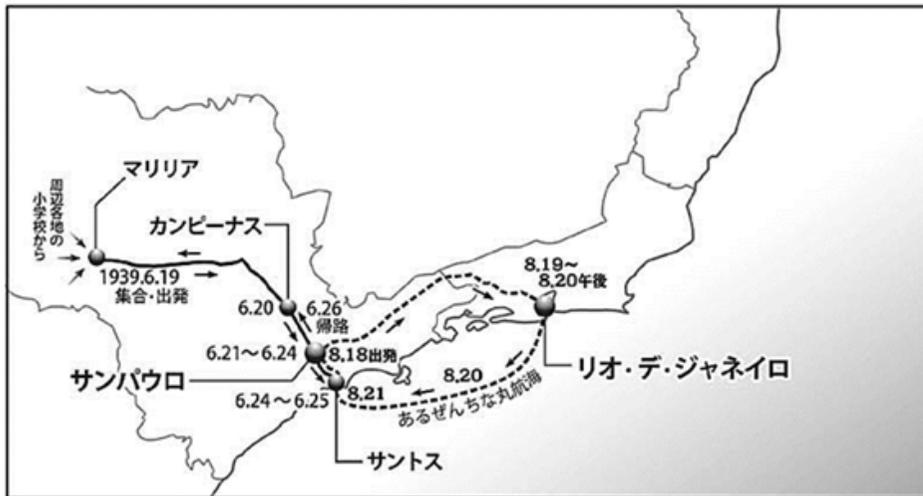
**根川** 日系社会の名士の一人であることは確かでしょうね。この写真の中で、ドン・ペドロ二世の銅像のちょうど台座の下に背の高い方が写っていますが、この方が恐らく両角校長だと思います。

ついでに言いますと、これの一番右のモーニング姿が両角先生ですが、娘さんの寿弥子さんによりますと、後でかわいい写真が出てきますが、両角先生は当時、身長が173cmあって、ブラジル人女性に非常にもてたと本人がおっしゃっていたそうです（笑）。

COLLECTION of MOROZUMI

修学旅行にて

On the School Trip



ブラジル日系小学校修学旅行経路図（根川幸男作成）

—— バ延長線小学校  
 ..... 大正小学校

## 「われらがテナー」藤原義江との出会い

先ほどの大正小学校の修学旅行は、リオデジャネイロからサントスまで、造られたばかりのあるぜんちな丸の処女航海で帰ってくるのですね。そのあるぜんちな丸の中で、実はヨーロッパから回ってきた「われらがテナー」と言われた歌手の藤原義江さんがちょうど乗り合わせていたということで、大正小学校の生徒たちと仲良くなって、「おじさん、われわれの学校に歌いに来てよ」と約束したそうです。それを藤原さんはよく覚えていて、1939年9月7日の日付が入っていますが、9月7日はブラジルの独立記念日です。独立記念日の式典だから両角校長はモーニングを着ていると思うのですが、そこで「われらがテナー」の藤原義江さんが「太平洋行進曲」などを披露したそうです。

細川 藤原義江は、戦前に2回ブラジルに行っています。1937年とこの写真の1939年です。今、話が出た処女航海のあるぜんちな丸には、結婚もない藤原秋子が同乗していて、ブラジルの幾つかの町で演奏会をしています。

それから、02の写真で注目していただきたいのは、奥の方に日本の旗とブラジルの旗が並んでいます。このように日本を称えつつもブラジルも同じ高さで称えるという儀礼の方法は、政治的に考えると面白い配置だと思います。根川さんの論文も、こういうことに触れていますね。縦に並べると、どうしてもどちらかが上になってしまうので、横に並べるのです。それでブラジルに対する忠誠も表現しているということです。

黒板にはポルトガル語で何か書いてあります。細かくて読めませんが、そういう中で「われらがテナー」がこうやって紹介されている、もう少しいろいろ考えたいような写真ですね。



「1939 伯国独立記念祝賀式（大正小学校）」

## 両角先生、渚のモッサに夢中？

**根川** 03はリオデジャネイロの、恐らくボタフォゴかコパカバーナの海岸だと思います。この写真はどのような場面で撮られたかという、日付を見ると、先ほどの大正小学校の修学旅行の日付と同じです。つまり、両角校長先生は修学旅行で子どもたちをリオデジャネイロに連れて行って、自分はCONTAXをぶら下げて海岸をぶらぶらしながら、こういう写真を撮っていたということです。これは割合おとなしい写真です。

ブラジルではモッサとかモッシーニャと言いますが、例えばこのように海岸にたたく女の子たちの姿ですね。

**細川** 後ろはポン・デ・アスーカルという有名な山です。皆さんも来年、ワールドカップが近づくと毎日見せられると思います。

**根川** リオデジャネイロのシンボルの山ですね。「砂糖パンの山」という意味です。

ちょっと飛んでしまうのですが、04はサントスのゴンザガという海岸で、両角さんの奥さんと、この写真を提供してくださった寿弥子さんが4歳のときの写真です。

この後、延々とビーチの女の子の写真が続くのですが、実は05の辺りに大正小学校の他の同僚の先生たちが写っているのです。生真面目にこういうソフト帽を被って、スーツを着て写っていらっしゃるのですが、校長先生の方はこのように女の子たちを延々とCONTAXで撮っていると。こういう写真が続くわけです。

どうも両角先生は、女性のバックスタイルに非常に執着があったようです（笑）。ブラジル女性のバックの写真が、この「両角コレクション」の中には非常に多いのです。こういう写真ですね。これはどういうことかと思うのですが、周りに修学旅行生たちがいたのでしょいかね。



ポン・デ・アスーカルとモッサたち



「1940年1月 ゴンザガ海岸」



「1939年8月 コパカバーナ海岸」ほか

06



「1939年8月 コルコバード」

### コルコバードのキリスト像

**細川** 06はご存じのコルコバードのキリスト像です。ここにも必ず観光名所として行っていますね。

**根川** これはもろに修学旅行の写真ですが、背が高いのが両角先生、そして周りが修学旅行生たちです。

**細川** 女性ばかりですか。女学生が多いですよ。そうでもないですか。

**根川** いや、決してそうではなくて、男子生徒たちも先ほど写っていたのですが、どういうわけか、このときは女の子ばかりが集まって写したのでしょうか。両角先生の趣味なのでしょうか。

07はボスケ・ダ・サウジというサンパウロ郊外にある自然公園で、よくピクニックで日系人たちも含めて訪れたのですが、このようにボスケ・ダ・サウジでみんなが一緒になって写っているピクニックの写真が何枚かあります。

07



ボスケ・ダ・サウジにて

## 未来都市ブラジル

根川 08はツェッペリン号がブラジルにやってきたときですね。

細川 これは1939年ですね。あまり近代的でないというか、皆さんはブラジルの都市のことをご存じないかもしれませんが、ブラジルでは1930年代には30階建ての130mのビルがイタリア人によって建てられています。同じ時期に日本では丸ビルが8階建てで、確か30mぐらいだったと思いますが、その何倍かのビルがサンパウロ市のど真ん中に建っています。そういうわけで、高層ビル街が徐々に、日本よりも早く建てられていたということです。

根川 そうですね。「ブラジルだからといって、ばかにするなよ」という意味ではないのですが、サンパウロやリオデジャネイロはこのように東京や大阪よりも早くからアーバンゼーション（都市化）が進んでいたスーパーシティ、メガロポリスであったことが分かります。

## COLLECTION of MOROZUMI

# 生活 と 文化

## Life & Culture



「ツェッペリン（ヒンデンブルグ号）サンパウロ訪問」



「1940年8月 サントスにて」

根川 どんどんいきましょうか。09はそうした中で生活する日本人ですね。

細川 自家用車を持っていたと思いますから、この人たちはある程度の富裕層ですね。もちろん同じ時期のサンパウロには、お金がなくて農園を逃げ出してきて、半分地下室に住んでいる文なしもいたのですが、先生方はそうではなくて、もう少しいいところでこういう生活をしておられました。

根川 先生たちの給料は必ずしも十分ではなかったと言われているのですが、大正小学校が特別だったということと、両角さんは先ほど申しましたように、当時は唯二の日本とブラジル両方の教員免許状を持った方でしたので、間違いなく日系社会ではエリート層に属する人でした。

この写真なんか、非常にセンスのいい切り取り方だと思うのですが、彼の同僚の家族と、そして一番左の窓から顔を出しているのが娘の寿弥子さんです。

10



日本音楽研究会の集まり

11



ジョッキークラブ

12



全伯水泳大会

## 音楽会、競馬、スポーツ大会

**根川** 10なんかは面白いと思いますが、1940年10月ですね。この辺りにちょっと写っているのですけれども。

**細川** 日本音楽研究会です。これは蜂谷さんです。農園を持っていた方々がサンパウロ市内でエリート社会をつくっていて、三味線や琴をひき、ラジオにも出演した記録があるのですが、その記念撮影ですね。調べれば演目まで分かると思います。三番叟があったり、「鶴亀」のような、日本でもよく演奏されていたものがブラジルでも演奏会で演奏されたりしていたということです。

**根川** 太平洋戦争直前まで、このように日系人は自分たちの趣味生活を味わっていたというか、楽しんでいたことが分かる写真かと思います。

**細川** 11はサンパウロ市内の競馬場です。通常は「ジョッキークラブ」と英語の名前で呼ばれていて、1875年に開場しました。日本で横浜に競馬場ができたのがそのころだったのではないかと思います。そして、1910年代に、そこから飛行機が飛んだことがあります。日本では代々木練兵場にマイルス号でしたか、そういう飛行士が飛んできました。同じように、リオとサンパウロ間で飛行がありました。これは恐らく1941年に改装された後のジョッキークラブだと思います。今もあって、サンパウロ大のすぐそばですが、何とモダンだと思いませんか。日本の東京競馬場がどんな建物だったのか知らないのですが、これを見るとファシズム時代のイタリア風建築ですよ。井上さんに聞くとよく分かると思うのですが、そういう建物が1940年代に建っていました。

**根川** これもよく見ると、やはり女性の後ろ姿が写されていますね。彼が女性のバックスタイルに非常に執着があったことがよく分かる写真です（笑）。ブラジルは伝統的にドイツ移民も多いのですが、12はゲルマニアクラブというドイツ系の都市生活者の方々のスポーツクラブの水泳大会です。「全伯水泳大会」というキャプションが付いていたと思うのですが。

**細川** では、日本人の大会ですね。

**根川** 日本人も集まっていますし、ドイツ系やイタリア系、スペイン系の方々も対抗競技のように陸上や水泳を競っていたそうです。

**細川** 1930年代後半にはスポーツ大会が非常に盛んになって、日本人だけの陸上大会があって、それから、野球も始まります。野球の場合は日本人ですから、本当に民族的なスポーツ大会と言ってもよくて、ちょうど甲子園や、日本で言うと大学野球が人気だったのと同じように、植民地対抗とか、学校対抗もあるのですよね。

**根川** この中にあるのをちょっと出してみましょう。

**細川** 野球大会は、日本人がああ野球場で開いたのですか。

根川 そうですね。

細川 サンパウロ市内にあるのですが。関係ないですが、先月、南米の少年野球大会があったのですよ。僕は先月ペルーに行ったのですが、そのペルーチームの壮行会に行ったら、「3日後にはブラジルのサンパウロに行くのだ」と言っていました。「ペルー」と書かれたユニフォームが皆さんに配られて、歌うというようなセレモニーを見てきました。

ここで話をしようと思うのですが、大正小学校に野球部があったかどうか分かりませんけれども――。

根川 ありました。

細川 あったのですか。その対抗チームに、聖州義塾というものがあったと思うのですが、その話をしてもらえませんか。

根川 先ほど申しましたように、当時はサンパウロ州を中心にたくさんの日系小学校がありました。1940年ぐらいの統計では、467校、あるいは約600校とも言われる日本人学校があったわけです。その中で聖州義塾という、今お話に出た私塾兼小学校がありました。聖州義塾は、小林美登利さんという京都の同志社出身の牧師が開いたプロテスタントの教会と学校と寄宿舎が一体化した、全人教育を行う教育機関です。野球が強いとともに、小林美登利さんが剣道3段だったこともあって、ブラジルで最初に剣道場を備えた教育機関であったとされています。

細川 武芸は当然、日本魂的なものを教育するのによかったそうですが、今見ていたらユニフォームに「TAISHO」と入っていましたね。

根川 そうですね。

細川 14の旗は何ですか。

根川 これはブラジルの国旗です。

細川 ああ、本当だ。学校の旗もあったのですか。

根川 聖州義塾の小林さんのスローガンが「大和魂を備えた良きブラジル市民の育成」です。先ほどお話がありましたように、当時はブラジルのナショナリズムの勃興期だったことと、それから、日本もやはり1930年代はナショナリズムが非常に盛んな時代だったのですが、大和魂を備え、ブラジルに永住していく良きブラジル市民をつくるのが、ブラジルに渡った日本人教育者たちの一つの願いだったということが、このような写真からも見えるのではないかと思います。

子どもたちは日本語を自由に操る二世の小学生たちでしたが、やはり掲揚される国旗はブラジル国旗なのですね。そういったことが見える写真ではないかと思います。



大正小学校地方予選



ブラジル国旗掲揚

15

COLLECTION of MOROZUMI

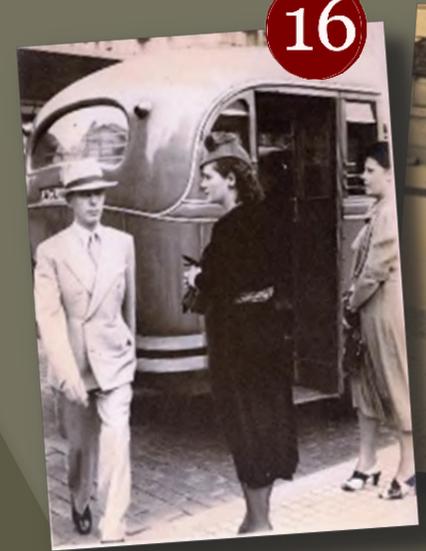
# 都市 サンパウロ

São Paulo, Megalopolis



都市サンパウロの街並み

16



サンパウロの女性たち



17



カテドラル・セー前の広場に集う若者たち

## サンパウロ市街

**根川** 先ほどちょっと申しましたが、都市サンパウロということで、彼が都市のサンパウロの風景を撮ったたくさんさんの写真があります。15のような、こういった写真ですね。

**細川** ここにはちょっと写っていませんが、1910年代、明治の末にちょうど日本で三越ができるのと相前後して、イギリス系のマッピンというデパートができています。ですから、そういう点で、日本もブラジルも近代化のテンポはそれほど変わらなかった。20世紀の消費文化がブラジルにも訪れていたということです。

**根川** 先ほど申しましたように、やはり都市の写真も女性のバックスタイルの写真が多いですね。彼の写真の撮り方は非常にセンスがあると思うのですが、16のような写真ですね。

17はカテドラル・セーです。

**細川** 一番大きな大聖堂ですね。

**根川** サンパウロのカテドラルの前の広場に集うブラジル人の若者たちです。

**根川** 18がキンゼ・デ・ノベンプロのブラジルの銀座通りですね。

**細川** そうですね。「三角通り」といって、本当に銀座通りと同じですね。この付近にはマッピンというイギリス資本の百貨店がありました。1939～1940年ですから、当然、日本の銀座付近にも三越や松屋などがありました。

**根川** ブラジルの最新のモードを身に付けた女性たちが、ウインドウショッピングをしているという作品ですね。

**細川** 19は夜の大売り出しですね。

**根川** LIQUIDAÇÃOと書いてありますね。セールということでしょうか。やはり女性たちの写真です。

それから、20はサントスですね。



キンゼ・デ・ノベンプロの三角通り



夜の大売り出し



サントスのようす

21



「サントスに西江先生を送る」

### サントスに西江先生を送る

根川 最後です。21は史料的に価値のある写真で、「サントスに西江先生を送る」というキャプションが付いています。先ほどご紹介したように、両角先生は第1回ブラジル派遣教員留学生としてブラジルにやってくるのですが、実はこのブラジル行きの教員留学生制度は2回しか行われません。その後は両角先生たちの体験に基づいて、ブラジルで育った二世たちを日本に留学させて、帰ってきた人たちを日系の小学校の先生や幹部職員として育成していくというように路線転換するわけです。その第1回の日本行きの留学生として送られたのが、西江米子先生という二世の方で、これは彼女が船に乗ってサントス港を出航していく日のワンカットです。

実は、彼女がいつ日本へ向けて出発したのかを私は追い掛けていたのですが、その出発の日がなかなか分かりませんでした。それが、この写真とこのキャプションによって、西江米子先生が日本に留学するためにサントスを出航する日が分かったのです。こういう面で、古写真は移民史を勉強していくにしても、あるいは他の歴史を勉強していくにしても、イメージだけでなく史料的な価値が高いものであることを今回再認識しました。

22



自転車レース大会のようす

細川 どうもありがとうございます。この写真コレクションは半年ぐらい前に初めて見せてもらって、本当に驚愕しました。僕も最新の本に何枚が使わせてもらいましたし、見たこともない姿や、ブラジルのサンパウロ市の歴史でしか知らなかった、例えば 22、市内を走る自転車競技を見学していた日本人がいたことへの驚きもありました。

イタリアのファシズム時代にも、ミラノー周自転車レースなどが確かあったと思いますが、それに似たことをサンパウロ市内でやっていて、それを日本人が見ていたわけです。

先ほど「蒼氓」史観と言われましたが、ブラジル移民、すなわち農民は、数の上では正しいとしても、1940 年ごろには全体のほんの 3～4%、とはいえ 2 万人ぐらいになりますよね。

根川 7000～8000 人だと思います。

細川 その程度であるとしても、市内に住んでいた人がいて、こうした教育を受けて、モダンな文化も享受していたというのが結論です。その証言として、写真が本当に役に立ったという一幕でした。よろしいですね。

根川 はい。

細川 では、どうもありがとうございました。

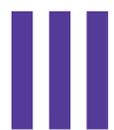
どうもありがとうございました（拍手）。

人間文化研究機構 国際交流基金  
両角資料による日本人移民への新視点 満洲・ブラジル・南洋  
主催 人間文化研究機構 国際交流基金 両角資料保存会

### 両角コレクション

- 二冊の写真帳に整理された99枚の写真
- 1939年6月～1941年9月頃(太平洋戦争直前)撮影 (CONTAX F2)
- 大正小学校の生徒達
- サンパウロの街角
- 日系人の生活(家族や友人達)
- 首都リオデジャネイロの風景





南洋

The South Seas

# 強制収容所に届いた妻の手紙——仏領ニューカレドニアの沖縄移民

津田 睦美 TSUDA Mutsumi

写真作家 成安造形大学准教授 Artist Associate Professor, Seian University of Art and Design

皆さん、こんにちは。私は日文研の者ではなく、たった一人アウェーで今日ここにおります。まず、皆さんにお聞きしたいと思います。ニューカレドニアに移民が行っていたということを聞いたことがある方がおられましたら、手を挙げていただけますか。(会場:挙手)思った以上におられて、とてもうれしく思います。ありがとうございます。

今日はこれから、ブラジルや満洲に比べてかなりマイノリティーなニューカレドニアについてお話しさせていただきます。

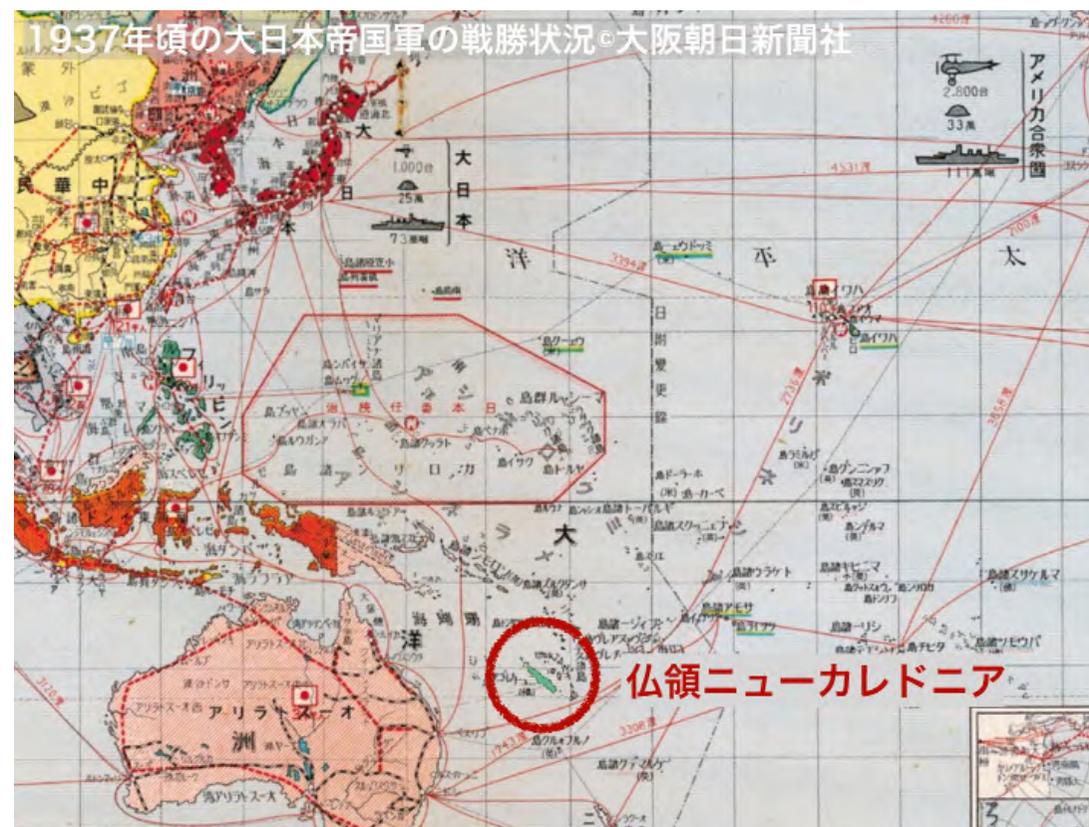
## ニューカレドニアとは

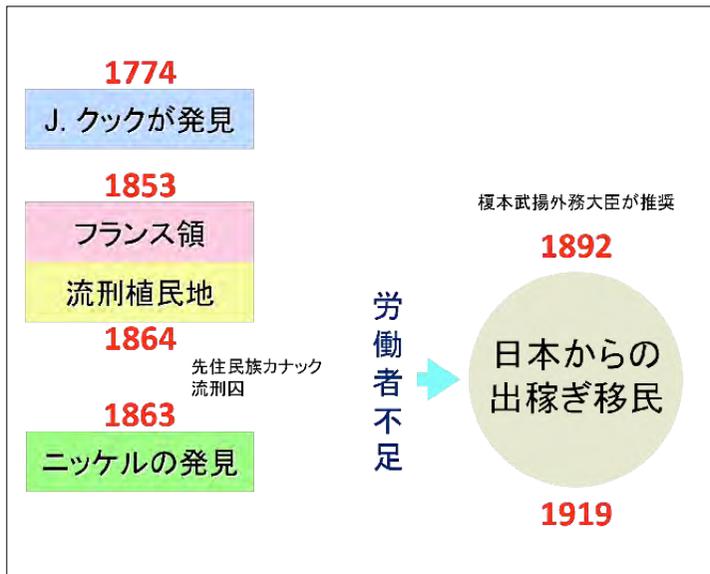
まず、ニューカレドニアはどこにあるのかを見て下さい。右の地図は1937年に大阪朝日新聞社から発行されたもので、第二次世界大戦前の太平洋地域の勢力関係がわかるものです。こういう地図は結構あるのですが、ニューカレドニアを含むものは少ないです。

ニューカレドニアはオーストラリアの東側に位置する、小さな小さな島です。面積は日本の四国ぐらいの大きさだと言われています。現在の人口は23万人です。

この地図で見ますと、日本は左上にあります。1941年12月にマレー半島とハワイの真珠湾を攻撃したことから太平洋戦争が始まり、それによってニューカレドニアにいる日本人たちも運命が狂っていきます。今日はその流れを画像資料を使いながらお話ししたいと思います。

ニューカレドニアには、太平洋戦争が始まった後、1942年3月から米軍がたくさん上陸してきます。次々と道路や飛行場、病院を建てて、あっという間にここに対日拠点をつくります。サンフランシスコに次ぐ2番目に大きな規模だったそうです。そして米軍や、オーストラリアやニュージーランドの連合軍がやってくるのと入れ替わりで、ここに暮らしていた日本人は追放されるのです。敵性外国人となり、全財産を没収され、隣のオーストラリアの強制収容所へと送られていきます。





## ニューカレドニア移民の特徴

- ・ 20～40歳の単身男性（農夫）に限る
- ・ 1892年から1919年に限る短期間の移民
- ・ 日本の統治下でないフランス領土
- ・ 領事館は1940年3月～1941年12月まで設置
- ・ 戦争で日本人コミュニティが消失
- ・ 戦後移民がない
- ・ 日系二世は全員混血、日本語がわからない

なぜ日本人が追放されたかということ、日本人は当時この島で多方面にわたり経済的に成功していて、しかも島中に拡散して居住していたということで、彼らがスパイになる可能性が疑われていたからです。そういう不安な要素を取り除くため、そして、彼らが築いた財産を取り上げることは、フランス政府にとっては非常に大きなメリットがあったのでしょう。

ニューカレドニアというと、なんといっても森村桂さんのベストセラー小説、『天国にいちばん近い島』が有名ですが、今ではこのタイトルが独り歩きして、白い砂浜がある楽園というイメージだけでわれわれはこの島をみている。しかし、実際には非常に複雑な歴史を負ってきた島です。

それはどういうことかということ、ニューカレドニアは1774年にイギリス人の探検家、ジェームズ・クックによって発見されます。1853年にはナポレオン三世がフランス領土と宣言し、1864年にフランスの流刑植民地になるのです。そして、フランスで犯罪を犯した人たちがどんどんここに送られてきて、この島の開発に携わる労働力となっていきます。

ニューカレドニアの運命が大きく変わるもう一つの事件は、1863年にこの島でニッケルが発見されたことです。当時は世界最大と言われるほどの埋蔵量で、当初はフランス領にいた先住民族のカナックという人たち、あるいは流刑囚がその労働力として利用されていくのですが、ニッケルの量があまりにも多く、人手が足りないということで、1892年から近場のアジアである日本から出稼ぎ移民が集められるようになります。この移民たちは、榎本武揚外務大臣の推奨によって送られた国のお墨付きの移民でした。しかし、1919年で契約移民は終わってしまいます。

## ニューカレドニア移民の特徴

ニューカレドニア移民の特徴はどのようなものか。まず、20歳から40歳ぐらいの単身男性です。移民会社が望んだのは農夫で、ニッケル鉱山で「鍬や鋤の代わりにつるはしを持ってニッケルの露天掘りをする簡単な仕事ですよ」と言って勧誘しました。それから、先ほども言いましたように、募集があったのは非常に短い期間であったということで、日本人が一番多いときで4000人ぐらいが島に暮らしている程度でした。

それから、ここは南洋という地域に入りますが、日本の統治下にはないフランス領土でした。1940年によく日本の領事館が設置されます。表向きには邦人の管理といわれていますが、真の目的はニューカレドニアで採れる天然資源を日本の軍需産業用に輸出するバックアップをするためだったようです。それもほんのわずかの間で、開戦により閉鎖となりました。

結局、戦争によってニューカレドニアの日本人コミュニティは完全に消失します。島に残った日系二世の人たちは、お父さんが単身男性で島に渡ってきている日本人、お母さんはみんな現地の女性ですので、混血です。そして、戦争を挟んで日本語は誰もわからなくなり、日系社会は父親の母国「日本」と断絶せざるを得ない状況になりました。

## 比嘉伝三氏のライフストーリー

ここで、比嘉伝三さんという一人の沖縄移民のライフストーリーをお話したいと思います。配布資料に比嘉さんの年表を添えているので、ご覧ください。

まず、私がどうしてニューカレドニアに通うようになったかということ、を、ちょっとだけお話しします。2003年にチバウ文化センターというアートセンターの招待でニューカレドニアに行ったのが最初です。そのときは日系二世のポートレートを撮影して、自分の作品を作って展覧会を開くことが目的だったのですが、その撮影前に被写体となる方からいろいろな話をちょこちょこ聞いていたうちに、その人たちの経験に驚きながら、どんだのめり込んでいったのです。その後、写真を撮るよりも聞き取りや文献調査、そして、当時の写真を集めることに没頭するようになりました。

それで出会った比嘉伝三さんの三女、右側に写っているセシルが私にとって最大のキーパーソンになります。この写真は、私が作品として発表したポートレートシリーズの1枚です。右側がセシルで、左側がお姉さんのオデットです。ご自宅に伺って、2時間ぐらい話を聞いて、シャッターを切って帰ってくるというのが、私の基本的な仕事の仕方です。

セシルは、私がそれまでに会った日系二世の中で、最も自分のお父さんのことを知っている人でした。例えば1979年には、沖縄から比嘉伝三さんの末裔を探しに来た親族の方に出会っていますし、その3年後にはセシル自身が単身沖縄に行き、約1カ月間、いとこの女性の家に居候して過ごしています。

さらにセシルにとって転機となったのが、ニューカレドニアで1980年代に先住民族のカナックが起こした激しい独立紛争です。市民が悲惨な暴動や殺りくにまきこまれていく中で、自分は一体何者か、自分のルーツをもっと知りたい、そして、そのことを自分の子どもや孫に伝えていきたいと思うようになったといいます。

私がセシルに初めて出会ったのは2003年で、1943年にオーストラリアの強制収容所で亡くなったお父さんのお墓参りに行く準備をしているところでした。

### 比嘉伝三／ひがでんぞう（1881～1943）

- 1881（明治13）年11月 沖縄県名護生まれ
- 1905（明治38）年12月 ニューカレドニアのティオに到着
- 1906（明治39）年06月 ティオのボルネ鉱山から逃亡
- 1923（大正12）年11月 カナック人女性、ローラと結婚し、北東部のコカンドン村（トゥオ市）に定住
- 1925（大正14）年07月 第一子誕生（四男四女に恵まれる）
- 1941（昭和16）年12月 敵性外国人として逮捕される
- 1941（昭和16）年05月 オーストラリアに移送される
- 1943（昭和18）年06月 オーストラリアのヘイ強制収容所で死亡（1963年、カウラの日本人墓地に）



Odette et Cécile 2003 © Mutsumi Tsuda



ティオに到着したポーハタン号 (1905) (Raymond Magnier 氏所蔵)

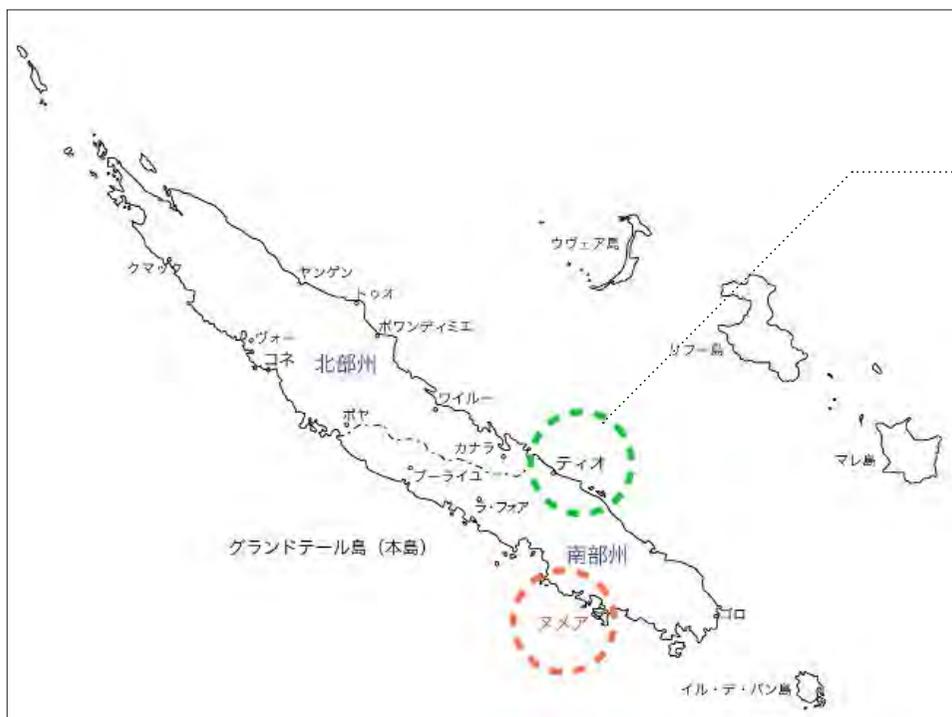
## 移民船ポーハタン号と鉱山の絵はがき

次に、古い画像資料から、移民船の写真と鉱山の絵はがきをお見せしながらお話していきます。比嘉さんが乗っていたのはポーハタン号という、1905年に神戸からニューカレドニアに発った船です。

比嘉さんは沖縄の名護市で生まれ育って、20歳のときに沖縄で最初のニューカレドニア出稼ぎ移民の募集に単身で応募します。このポーハタン号に最も大勢乗っていたのは比嘉さんのような沖縄の人で、移民名簿を見ると358名が沖縄の人で、総数561名の64%を占めています。1879年の廃藩置県、いわゆる琉球処分を経て琉球王国が終わり、沖縄県が配置されて近代化が進んでいた時代です。

比嘉さんを乗せたポーハタン号は、ニューカレドニアのヌメア港に入り、その後、鉱山のあるティオに上陸します。12月5日に神戸を出て、クリスマス直前の23日にティオに着いています。

当時のティオはニッケル開発の世界最大の拠点でした。しかし、今は見る影もないぐらい何もありません。



ティオの鉱山風景 (1906) (加島貢太郎氏所蔵)



先ほどの写真を拡大してみます。プロジェクターだと非常に大きくなるので、この人たちの様子がより詳しく見えます。みんなこっちを向いていてカメラ目線です。まるで現在のわれわれに対峙しているように思わせる写真です。目線はみんな上を向いているので、恐らく港から誰かが撮影したのでしょう。そのときに到着したばかりの移民たちを甲板上上げて、「はい、こっちを向いてください」という感じで撮ったものだと思います。移民船が着いた12月は、南太平洋のニューカレドニアでは真夏です。上陸前に身なりをととのえたのでしょうか、この厚着では相当暑かっただろうと想像します。

この写真をちょっと動かします。顔を見た後は部分的な帽子や服などを見ていきます。いろいろな帽子を被っています。沖縄の人らしい着物を着こなしている人もいたり、左端には学生服を着た青年がいたり、職人風の格好をした人がいたりして、これを見る限り、移民会社が求めていた農夫以外の人も混ざっていたことが見えてきます。

さらに、右下に女性がたくさん写っています。本来、女性は募集していなかったのですが、唯一この船にだけ60名の女性が乗っています。何人か子どもを連れてくるのがおわかりになりますでしょうか。子どもがシャッターを切るときに動いたので、ぶれていますが、このように乳幼児を抱えている女性がいます。ここにも小さい子どもがいますね。

幼い子ども連れ的女性たちは、結局、この船から陸地へ上ることは許されませんでした。そして、1週間後の元旦に、そのまま同じ船で神戸まで送り返されます。非常に大変な苦難だったと思います。雇用主は、働き手にならない女や子どもは不要であるという理由で、容赦なく送り返したのです。その責任を負うべきは間に入った移民会社であり、家族同伴であれば移民しやすいだろうというようなうたい文句で移民を集めざるを得なかった。船を満杯にしないと元が取れないというような事情があったことがわかります。

この写真はもともと絵はがきサイズですが、とても質が良く、写真ならではの拡大、縮小が容易にできるわけです。この絵はがきを貸して下さったのは Raymond Magnier さんという、おじいさんが鉱山会社の支局長だった方で、こういう写真をたくさん持っておられました。

20世紀の初めといえば、絵はがきが世界中で大変流行していた時代です。ニューカレドニアの場合、主要産業であったニッケル鉱山をモチーフにしたものがたくさん残っていて、おそらく鉱山会社にとってはこれは記録であり、広報宣伝のツールであり、そして、お土産になるノベルティであったのでしょうか。また、





当時はまだ新聞に写真がなかったので、鉱山での事故や自然災害などのニュースを視覚的に伝えるという重要な役割も絵はがきが担っていました。

驚いたのは、この Magnier さんが右側下段のような絵はがきも持っておられたことです。日本の、いわゆる芸者とヌードの写真です。おそらく日本から移民に付いてやってきた移民監督（通訳）が持ち込んできて、クリスマスやお正月の挨拶にこれを使って、上司に当たる方に渡していたのでしょう。



ニューカレドニアの鉱山絵はがきと日本の芸者絵はがき (Raymond Magnier 氏所蔵)



津田陸美著『マブイの往来』（人文書院）より（加島貢太郎氏所蔵）



加島貢太郎所蔵



加島貢太郎所蔵

## ティオに上陸する移民

次の資料は、先ほど船でティオに着いた人たちが上陸の様子をとらえた写真です。

船の上で健康診断が行われ、雇用主と新たに契約を交わした上でティオに上陸する、比嘉さんを含む人たちの様子がわかる写真です。これは私の本の見開きページを見せていますが、私は、こうした一次資料として集めた画像資料を、二次使用するにあたり、たくさんあった写真の中からセレクトし、映像のようにコマで流して見ていけるように編集しています。

拡大していきます。この写真は、もともとはタイトルのない小さなアルバムに収められていたものでした。アルバムを持っておられたのは、1930年代にニューカレドニアのニッケル、鉄、クロムに目を付けて鉱山開発を手掛けた日本人、加島さんという方の息子さんです。息子の貢太郎さんは、お父さんが大量に残した写真を何かわからないまま段ボールに入れて持っておられました。それを私が借りて、いろいろな形で使わせていただいているわけです。

先ほどの両角先生は、写真がとてもお上手な方でした。ニューカレドニアでは、やはり両角さんのように自分のカメラを持って撮っている方もおられましたが、素人の方が撮る写真は大抵中心に人が写っているだけで、状況がわからないものがとても多いのです。しかし、この加島さんが所蔵する写真は、おそらく鉱山会社に雇われたプロが撮ったものでしょう。ホワイトカラーである雇用主と同じ位置にいるカメラマンが労働者を上から目線で撮っていることが、写真を見ていただくとおわかりになると思います。これらの写真には、幸い日付が裏に書き込んでありました。それでこの写真が、先ほどのポーハタン号に乗ってきた移民が上陸するときのものであると特定することができました。

ポーハタン号の写真は顔がよく見えて、何を着ているかがよく見えたのに対して、こちらの写真の日本人はみんな労働着に着替えて、麦わら帽子を被っているため、顔がちょうど帽子の日陰になって見えません。



まさにこの日から彼らは名前ではなく、労働者に与えられた番号で取り扱われていくのです。そういうことを象徴的に語っていると思います。背後に写っている海上の船は、おそらく乗ってきたポーハタン号だと思います。

先ほどの両角先生は女性の背中ばかりを撮っているという話でしたが、ここでは移民監督の背中です。白い服を着た大きな背中が写っています。このように上から移民たちを見下ろしているわけです。プロジェクトでこれぐらい拡大すると、移民たちの表情も多少はみることができます。

この時代、ティオはとても有名なニッケルの開発拠点でしたので、白人女性もニッケル開発の最大拠点に見学に来ています。この写真はそういう意味では、白とグレー、ダークグレーという、色のコントラストからみても人間関係のヒエラルキーがはっきりと現われています。近代写真の父と言われるアルフレッド・スティーグリッツが、1907年にニューヨークからヨーロッパに向かう船で撮った有名な「三等船室」という作品がありますが、それと本当によく似た構図になっています。

移民たちが<sup>やなぎごうり</sup>柳行李を一つ持っただけでやってきたことがわかります。この柳行李がみんな同じ形をしているので、出港前に神戸で買ったのか、あるいは与えられたものかもしれません。当時の移民たちがかなり身軽で出稼ぎに行ったことが、ここからもわかるかと思えます。

この後、この人たちは、普段は鉱石を運搬するためのトロッコに乗せられて、山の上にある宿舎まで移動していきます。トロッコはどんどん山奥に入っていきます。

これが宿舎です。鉱山に近いところにあります。比嘉伝三さんもこの中にいたメンバーですが、彼は半年ぐらいでこの鉱山から逃亡してしまいます。この山を歩いて逃げたのです。そういう逃亡移民が後を絶たず、移民会社はその負債を非常に多く負っていくことになります。そのために、それまでは移民会社が日本からの船代を払っていたのですが、これ以降は自分たちで負担するように契約が変わっていきます。



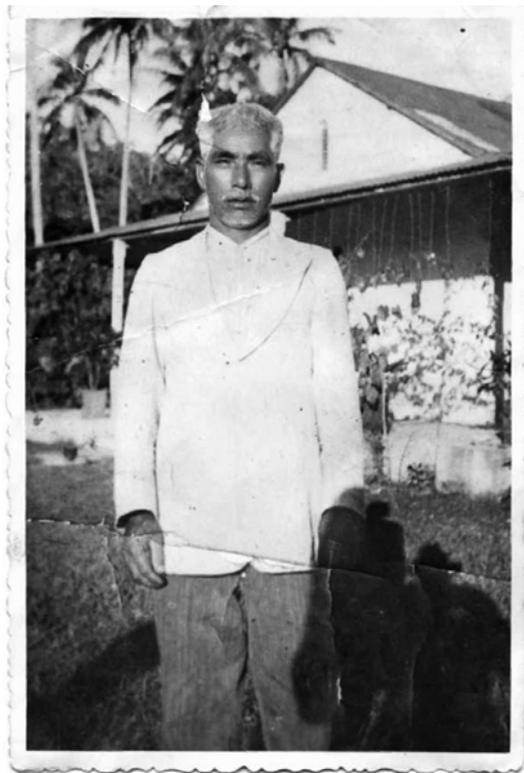
## 外国人登録票の写真

右の写真は比嘉伝三さんの外国人登録票に貼られている写真です。これはニューカレドニアの政府公文書館に収められている外国人登録票の中の1枚で、34Wという番号が振られています。日本人以外にも、戦前のある時期にニューカレドニアに居住していたいろいろな外国人のものが入っています。

これは裏面ですが、表面には彼がいつ生まれたか、親は誰か、家族について、誰といつ結婚したか、子どもは何人いて、いつどこで生まれたか、いつニューカレドニアに入ってきたかといった基本的な個人情報全てが書かれています。裏側にはこういう証明写真が貼られていて、スタンプが押されています。上のスタンプは、1941年12月27日に逮捕してニューカレドニア内の収容所に入れたこと、そして下のは、5月29日にニューカレドニアからオーストラリアに向けて移送されたという記録です。表側には、彼が亡くなった年月日と場所も記録されています。



比嘉伝三氏の外国人登録票（ニューカレドニア政府公文書館所蔵）



1940年頃の比嘉伝三氏（セシル・ヒガ氏所蔵）

左の写真は、セシルが持っていたものです。外国人登録票に貼られている写真も同じカットの写真で、トリミングする前のものです。彼女に、この写真は一体どこで撮ったのかと聞きますと、ちょうど子どもの頃、この場に居合わせたといいます。この写真は、彼が住んでいたトゥオのレベック市長が自宅の前で、市長自身が撮ったものだそうです。

当時、フランス政府は、定着する日本人の数が増えて、例えば商売、製塩、野菜栽培、コーヒーなど、あらゆる分野で非常に成功した姿にある種の脅威を感じはじめていました。そして1933年、日本が国連を脱退したころに島中の日本人に対して一斉に国勢調査を行っています。おそらく同じような時期に先ほどの外国人登録票を作り、日本人が一体どこで暮らしていて、どんな顔かはつきりわかるようなものを開戦にそなえて作るということで、市長自らカメラを持たない人たちの写真を撮っていったのではないかと思います。

朝の光を浴びて、まぶしい顔をした比嘉伝三さんですが、手を見ていただくと、農夫ならではのごつい手をしています。多分、一張羅を着て、ここへ来ているのだと思います。当時、同じ沖縄移民たちにもたくさん仕立て屋がいました。鋤夫あがりの仕立て屋とは田舎に住んで、カナック人や日本人の服を、注文を受けて作っていました。ただし、プロではなくて、もともとある背広などをほどこいてハウツーを身に付けたのだと思います。布地は日本やフランス、それからオーストラリアから入ってきたようです。

比嘉さんの写真は、後にも先にもこの1枚しか残っていません。同じ写真が沖縄の彼の家族のもとにも送られていたと思います。これは想像ですが、多分、何枚か焼いて、1枚は自分たちが持ち、1枚は外国人登録票に貼られ、もう1枚は日本に送られたのでしょうか。でも、沖縄戦で沖縄の戸籍はほとんど焼失したのと同様に、家にあった写真類もほとんど焼失あるいは紛失したので、今では沖縄に写真などが残っているということはほぼありえないのが現状です。

## 松田幸三郎氏の手帖

私は2005年から、比嘉さん、セシルとの出会いを通して、ニューカレドニア移民の中でも、特に比嘉さんが住む島の北東部にあった沖縄人コミュニティに興味を持って、その移民母村である名護市周辺の集落を集中的に回るようになりました。一体どこから行ったのかということ、そして、どうしてそこの人たちが固まって暮らしていたのかということを探りながら『マブイの往来』という本を書く準備を進めてきました。

フィールドワークをする中で1冊の手帖に出会うことができました。手帖ですから写真ではないのですが、今日はこの手帖をあえて画像として取り扱って、これからお話ししていきます。

手帖の持ち主である松田幸三郎さんは1910年に名護の北側にある屋我地という小さな島からニューカレドニアに渡り、1946年にオーストラリアの収容所から浦賀を経て沖縄に引き揚げてこられた方です。戦後、沖縄で結婚されますが、その未亡人にお目にかかったときに、松田さんの遺品である1冊の手帖を見せてもらうことができました。そこにはフランス語でぎっしりと文字が書き込まれていたのです。松田さんの奥さんも、お子さんたちも、フランス語で書かれた手帖を「父はきっと秘密を持っているから読んではいけない」と思って、ずっと翻訳せずにそのまま大切にしていました。それを見せてもらったわけです。

どんなものかという、こんな手帖です。実物は小さな手帖で、こんなに大きくはなくて手のひらサイズの手帖ですが、はっきり言って、私はこれを見たときには鳥肌が立ちました。何かわからないけれども、人の執念のようなものが伝わってくる手帖だと思ったのです。

この手帖はペン書きで几帳面に書かれています。松田さんの性格なのでしょう。初めに鉛筆で下書きをした後になぞっています。あまりにもぎっしり書かれているので、切れ目がわからないし、日付も入っていないし、日記なのか何なのかさっぱりわからない。なにしろ私は興奮しているので、細かいところに目が行かないのです。でも、こうやってどんどんページをめくっていくうちに、幾つか漢字が含まれていることに気が付きます。そして、私のなじみのある名前がいくつか出てきたのです。

松田幸三郎氏の手帖（松田アキ氏所蔵）



[3 / 7. 43 年 kokingone]

C'est avec bien des peines et bien des regrets  
 que je suis venu après le grand Malheur qui  
 m'est arrivé vous me permettez de vous  
 demander, un service sacré, celui de bien  
 entretenir la tombe de mon pauvre cher et  
 très regretté [傳三] vous priez, cher monsieur  
 de bien vouloir lui faire cimenter sa tombe  
 et de la surmonter d'une croix en ciment bien  
 provisoirement en attendant sur laquelle vous  
 y fixerez un écriteau en cuivre en forme de  
 cœur dont vous y ferez graver les inscriptions  
 voir nous et une couronne. Très S.P. des, que  
 vous aurez terminé les travaux vous la ferez  
 photographier, et de me les envoyer environ 9  
 photos et par cette même occasion, vous  
 m'envoyez la facture afin de me permettre de  
 vous payer d'avance le montant. P.S. plus  
 haut je vous ai dit tombe provisoire, et c'est  
 bien, parce que j'ai l'intention bien arrêtée  
 de vous vous demander, cher ~~de~~ un autre  
 service sacré que je pense vous ne me refuserez  
 pas de nous le rapporter le corps entier mais

dans un cercueil - réduit d'ici 5 ou 6 mois  
 lorsque vous reviendrez en Nouvelle Calédonie  
 car c'est ici à KOKINGONE que j'entend  
 l'inhumation définitive [kokingone] veuillez moi  
 pour me dire, si vous accepterez, car vous  
 savez qu'il aurait voulu voir sa tombe  
 ici sur notre propriété en fait pour le  
 moment, et toujours, je serai bien malheureux  
 se dite de quoi est il mort, dans l'attente  
 de vos nouvelles veuillez m'agréer avec nos  
 mille remerciements [mme 傳三出]  
 P.S. Si vous parliez pouvoir le rapporter ici  
 dans la colonie, je serais peut-être inutile  
 de monter sa tombe en ciment, mais de lui  
 poser seulement une croix en bois ou si il  
 est nécessaire une croix ciment, avec des  
 inscriptions, vous êtes si près du bien, ou il  
 est décidé. Nouvelle galle du sud, il vous sera  
 peut-être facile de vous entendre avec vos  
 compatriotes du bien, et de nous entretenir  
 en suite de ce qu'il aura été fait pour lui  
 afin que nous passions en cas de besoin  
 nous en occuper en espèces les frais de travaux  
 nécessaires d'alors c'est entendu pour cela

その中の一つが、ここに書かれている「傳（伝）三」という言葉です。「傳（伝）三出」、伝三が出したということなのでしょう。その前に「マダム」が付いていますから「マダム傳（伝）三出し」は、比嘉伝三さんの奥さんが出したということでしょう。なぜこの伝三のところだけ漢字にしているのかよく分かりませんが、これが私の最初に気づいた名前です。ただ、伝三という名前はそんなに珍しくはありませんので、どこの伝三かはこの時点ではわかっていません。

次は Kokingone（コカンゴン）という、皆さんにはなじみがないであろうニューカレドニアにある小さな村の名前が目にとまりました。Kokingone で伝三といえば比嘉伝三しかいない。このあたりで私はますます興奮していきました。次に出てきたここには日付が入っていました。1943年7月3日です。比嘉伝三さんは1943年6月22日に亡くなっているのです、これはその数週間後の手紙か、何かの記録であることがわかったのです。

前に私はセシルから、亡くなった比嘉さんの魂が光になってニューカレドニアに戻ってくるという話を聞いていました。映画のワンシーンのような、すごくドラマチックな話なのですが、読んでいったところ、その話が書かれていました。つまり、これはニューカレドニアの Kokingone に暮らす比嘉さんの奥さんのローラが、オーストラリアの収容所にいる松田さんに宛てて、夫が亡くなった後の悲しみについて書いている手紙だったのです。あいにく元の手紙はどこにも残っていないのですが、この手帖に書き写された一連の手紙には、ローラという一人の女性が戦争によって経験した絶望の記憶が濃密に閉じ込められていました。

セシルは、私が「松田さんという人のお家でこんなものが見つかったけれど、あなたは松田さんという人を聞いたことがある？」と聞くと、「全然知らない」と言いました。松田さんの方に「比嘉伝三さんという方をご存じですか。名護の出身ですけれども」と聞いても、「聞いたことがない」ということでした。ローラはセシルにお父さんのことをかなり話していますし、松田さんもニューカレドニアで何があったのかということをお父さんの子どもたちに話しているのですが、このことについては触れていなかったのです。これはいまだに謎です。これだけの記録を持っていながら、なぜ語らなかったのか。とても不思議に思います。

私はこの手帖を見つけたとき、もっと多くの人にこの手紙を読んでほしい、本が書きたいと思って、出版社に話を持っていきました。手帖の中身は大体何かわかったけれども、これを解読するために、1ページ、1ページを隅から隅まで見て、文章のつながりを探して、内容から誰が誰宛てに書いたものかを考えて、日本語に翻訳してもらいながら、事実に沿った補足を加えていきました。また、個人名があだ名であったり、部分的に書かれていてわ

からないところは、また現地に行って、この時代を生きた人たちや、この地域に暮らす二世に聞いて回りました。

例えば「イエイエ」という名前が出てきます。「イエイエ」というのは日本人なのか、カナック人なのか、フランス人なのかさっぱりわからない。そういう時はどうするかというと、私は現地に行って80才以上の二世たちに「イエイエを知っていますか？」とフランス語で問い掛けていきます。そうすると、彼らはこの音を耳で聞いて、それが誰なのかが大概わかるのです。5～6人に聞いたところで、「イエイエ」というのは「ヤエ」であると、比嘉弥栄という人であることがわかりました。そういうなぞなぞを解くようなことをしながら時間をかけて、それが一番楽しいのですが、私は手帖を読解していきました。この手紙は個人の往復書簡であると同時に、沖縄コミュニティの暮らしぶりを語りかけるものでした。

それからもう一つ、この手帖を見ながら疑問に思ったのは、どうしてローラの手紙がないのか、どうして他の人から来た手紙が松田さんに届いていなかったのかということです。私は自分がごく当たり前のように教育を受けて、読み書きができるから気が付かなかったのですが、当時はフランス語を書ける人はそうそういませんでした。ローラは先住民族のカナック人ですが、彼らが使っているのは自分たちの口承の言語であって、文字はないのですね。フランス語を使う人たちは相当教育を受けていて、しかも書けるとなると、とびきりの教育を受けた人です。ですから、他のカナック人の奥さんたちは誰も手紙が書けなかったのです。

ところが、ローラはプエボというところの大酋長の孫娘で、既にヨーロッパ人の血が入っています。子供のときからおばさんにフランス語を学んでいたおかげで、彼女は自分自身の生身の言葉で手紙を書くことができたわけですから、だから、こういう形で、映像が思い浮かぶような文章がここに残ったのです。

松田さんがここまで丁寧に書き写したのは、おそらく彼がこれを手本にしてフランス語を勉強していたのではないかと私は推測しています。松田さんは亡くなるまでフランス語の辞書を片手に持っておられたと遺族の方がおっしゃっていました。実は彼もニューカレドニアに家族を残していたので、その家族との縁が切れないように、フランス語という言葉がわからなくならないようにするために独学を続けていたようです。

このローラの文章は、フランス語として完璧なものだとネイティブのフランス人が言っていました。かなりクラシックだそうですが、そういうところからも、彼女がどういいう生い立ちであったかが読み取れると思います。一方の松田さんは尋常小学校を出ているので、日本語の読み書きはできますが、フランス語は全て独学でここまで学ばれま

した。日本人独特の間違いはかなりありつつも、こういう形で自分たちの体験や苦難の記録を残すだけの力があつたことに驚くばかりです。また、この手帖を埋めつくす松田さんの几帳面な文字を見ていると戦争によって失わざるをえなかったのもへの未練や執着が伝わってくるのです。

時間をオーバーしていますが、最後に、手帖も写真もそうですが、こうした貴重な資料を持っている人たちの高齢化が非常に進んでいます。その人たちは、自分の子どもや孫に話しても興味を持たないだろう、どうしたらいいのだろう、これから誰に託したらいいだろうと思っていることが、とてもよくあります。私も「あなたがそんなに興味を持っているのなら、あげます」と言われるのですが、私はオリジナルをもらう気は全くありませんので、スキャナでとって返却するようにしています。

写真を含む画像資料は、芸術作品でない限り、そこに何が写っているかわからなければ意味がありません。そういう意味でも、この時代を生きた人の語りや、歴史や地域の専門家による解説をきちんと聞き取って、記録して一緒に残すということを今しなければ、もう間に合わなくなっていると思っています。私は彼ら日系二世のおかげで自分の研究が成り立ってきたので、彼らが求めていることの解決策をこれから見つけられたらと思っています。

以上で終わりです。ありがとうございます。





小松でございます。時間があまりないので、最後の締めくくりの挨拶ということになりますが、今日はいかがでしたでしょうか。3年ほど前から調査を始めて、日本の近代に入ってから、ある意味では日本の帝国というものが形成する過程、あるいは拡大していく過程でいろいろな国々へ、お金持ちの人も貧しい人も、いろいろな形で出かけていきました。そういう人たちの歴史をどのように記録していくか、保存していくかという問題に、今、直面しているわけです。そのような日文研の大きなプロジェクトの一環として、今日は4人の方にご報告いただきましたが、これはあくまでもまだ中間報告で、始まったばかりのものです。これからさまざまな形で成果が出てくると思いますので、機会を見つけては、このような場を借りて皆さんにご報告したいと思っています。

私自身は、かつて日本の南洋群島と呼ばれていたトラック諸島で若いころから調査をしてきました。現在の生活を調査していたのですが、年を取った人は日本語をよく話されます。戦前の日本の公学校で日本語を覚えたということです。さらには、戦前にたくさんの沖縄の人をはじめとする日本人が移民してきて、カツオなどの漁業、あるいはヤシの油を採るなど、いろいろなことをしていたそうです。

私がそこで知り合った方は、戦前に現地で商売をしながら現地の人と結婚して、男女の子どもを二人ほど残したのですが、戦後、強制的に日本に送還されて、十数年たってようやくミクロネシア地域に日本人が入ることができたときに、そこを訪ねて行って子どもたちが貧しい生活をしているのを見て、そこにパン屋を開き、その二人の子どもを育てたということです。今日の津田さんのような話ですが、何十巻にもわたるテープを記録したことがあります。残念ながら、暇がないのでまとめている時間がないのですが、今日のお話を聞きながら、ああいうものも大変貴重な記録になったのだと。その方はミタチュウジロウさんといって、もう亡くなりましたが、そのようなものをこういう機会に、何らかの形でこのプロジェクトの中に組み込んでもらえれば貴重な資料になるのではないかと思います。

また、私の両親は満洲に勤めていて、引き揚げでした。私の母は大連の神明高等女学校を卒業して、その同窓会の熱心な参加者で、その都度、記念誌みたいなものを持っていました。これも、ひょっとしたらこのプロジェクトのほんの一部を担う同窓会名簿など、そういったものの記録になるのではないかという思いをしています。父、母はいろいろな満洲での体験を持っていたのだと思います。聞く機会はほとんどありませんでしたが、私の幼いころに、あそこに行った、ここに行った、あそこは良かったというようなことをちょっと耳に挟んでいて、私の父も母も今日のテーマと深く重なるような時代を生きただけという思いを新たに持ちました。

何らかの形で、このようなプロジェクトの一端を担わせていただければいいなと思いつつながら、今日の話をお聞かせいただきました。恐らく皆さん方の中にも、そういう思いを抱いた方がおられたのではないかと思います。皆さん方も、もしも何か貴重な資料等々がありましたら、日文研の方にご一報いただければありがたいと思います。今日は本当に長い時間をどうもありがとうございました。





大学共同利用機関法人

人間文化研究機構